

この素晴らしい世界で本当の居場所を！

味噌おでん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「もうたどり着いてた、おれたちの、本当の居場所に・・・」

アリアンロッドとの戦いで散った三日月・オーガスは幸運の女神、エリスと出会う。彼女から聞かされた話は、彼を新たな戦場へと誘った・・・。

基本的にクズマと駄女神と爆裂キチとDMの一行に情け容赦ない悪魔が加わるだけのお話です。

初投稿です。勢いだけで書いてます。生暖かい目で見守ってください。

作者なりの三日月になる可能性があります。「こんなの三日月じゃない！」という方はブラウザバックして下さい。

目次

プロローグ

The next life of crescent moon	1
It is the money that moves them	4
Enter the first quest / build a flag in little wizard	7
Bless me in the wonderful world!	10
Iron Blooded Brutals	13
クズと悪魔と、時々駄女神	13
中二病がパーティに加わるようですよ？	15
かえるがり	18
5人目の仲間はマゾクルセイダー	21
Is this crusader Masochist? / 三日月・オーガス	26
マゾとパンツと飛ぶキャベツ、の後半	31
これはアンデッドですか？いいえ、リッチーです	37
1面のボスってたいてい初期装備で無策でもなんとかなるよね	41
魔王軍幹部、ベルディア	44
ソードマスターミツルギ	49
激闘、ベルディア (前編)	53
激闘、ベルディア (中編)	55

激闘、ベルディア（後編）：決着!!

59

機動要塞デストロイヤー血も涙もない外道ズ

最近寒くなりました

65

結局普通が一番いい

68

不思議のダンジョン／風来のカズマ

73

ゴースト・パニック

76

プロローグ

The next life of crescent moon

広大な赤い空と大地が広がる世界で、二人の巨人が戦っていた。

片方の巨人は緑を基調とし、長剣を構えるその姿は、さながら騎士のようだった。

相對するもう一方の白い巨人は、異形としか称することができない程の風貌だった。

欠けた角、二つの瞳を紅く輝かせ、片側にしか残っていない異様に伸びた腕と背中から生えた尾で戦う姿は、人か獣か、はたまた悪魔か

——最後に立っていたのは、白い悪魔の頭こうべを掲げた緑の騎士だった。

主の威光を示した騎士、信じた男の最期の命令を果たそうとした悪魔。

薄れ行く意識のなかで、男の声を聞いた悪魔少年は静かに息を引き取った……。

——見渡す限り黒一色の、それでいて遠くまで見える奇妙な場所で、少年——三日月・オーガスは目を覚ました。

——……ここ、どこ？

直前までの記憶を振り替える。

——確か、おれは……

「——三日月・オーガスさん」

声のしたほうを見ると、そこには1人の少女が座っていた。

銀色の髪に修道女がしているような服装、なにより目を引くのは、この世のものとは思えない程の美芳だった。

「誰？アンタ」

——最も彼はそんなことを気にするような男ではないのだが。

「私はエリス、女神エリス。」

ようこそ死後の世界へ。貴方はつい先程、不幸にも亡くなりました。」

エリスと名乗る少女は言葉を続ける。

「——貴方には、転生していただきます」

——エリスの話を纏めるところだ。

- ・彼女はもう1人いる女神と共にとある世界を見守っている。
 - ・その世界では魔王軍と呼ばれる存在が人類を脅かしている。
 - ・魔王軍を恐れ、この世界の人間はもう一度この世界へ生まれ直すことを拒んでいる。
 - ・なので、他の世界で死んだ人間に力を与えてこの世界へ送り、命を増やすと同時に魔王軍の打倒を頼んでいる。
 - ・三日月の転生は天界によって決定付けられており、力は与えられない。
- ということらしい。

「生前貴方が犯した罪、あなた自身の持つ力、両方を評価した天界は、貴方に新たな生を与えることとしました。

多くの命を奪った罪は、命の重さを分からせることで祓う、だそうです」

傲慢ですね、と自嘲するようにエリスは苦笑いした。

「・・・他の皆は？」

自分より先に散っていった仲間はどうなったのだと、三日月はエリスに尋ねた。

「前世の記憶を忘れて新たな命として生まれ変わった者もいれば、貴方同様、他の世界へ送られた者もいます」

「・・・そっか」

「改めまして、三日月・オーガスさん。貴方には転生していただきます。・・・最後に、これを」

そうやってエリスが何処からともなくとりだしたのは、彼の丈には合っていない緑のジャケット、そして銃だった。

「貴方にはこれが必要かと。最も、どちらも貴方の記憶から作り出し

たコピーですが」

「・・・良いの？おれにはなにも——」

「力、ではないでしょうか？」

悪戯に成功した子どものようにエリスは笑った。

「——ありがとうございます」

ジャケットに袖を通しながら感謝する三日月に、エリスは最期の言葉を唱える。

「願わくば、貴方が魔王を倒す勇者となることを、祈っています」

その言葉と共に足元が光り、三日月の意識はもう一度途切れた。

「・・・いきましたか」

誰もいなくなつた転生の間には、エリスの音が響くのみ。

地獄のような世界で生まれ、奪い合い、搾取され、理不尽な世界に
抗い続けた子^{オルフェンズ}どもたち。

その中で最も純粹で歪な少年に、幸運の女神は祈る。

「どうか貴方に、新たな仲間と居場所が見つかりますように」

I t i s t h e m o n e y t h a t m o
v e s t h e w o r l d

目を覚ました三日月の目に映ったのは、今までに見たこともない光景だった。

石畳と木組みの家、そして道行く住人、彼が生まれ育った街に比べても、お世辞にも生活水準が高いようにはみえなかった。

——でも、みんな生き生きしてる。

少年兵やゴミのように扱われる命に囲まれた三日月には、明日への活力にあふれた人というのは、あまり見慣れないものだった。

希望をもって生きる人々を尻目に、三日月は歩を進める。目指すは冒険者ギルド、三日月の新たな戦いが始まるうとしていた。

——「労働」

働くこと。特に、賃金や報酬を得る目的で働くこと。

——某国語辞典より

三日月は働いていた。鍬で土を耕し、壁を塗り、土を運ぶ。

汗を流して金を得るといふのは意外にも三日月の性に合っていた。

そもそもなぜ三日月がこんなことをしているのかというと、ギルドの受付で冒険者登録をしようとしていた時までさかのぼる——

——冒険者として登録していただくには手数料として1,000エリスが必要となります。

金どころか今日の食い扶持すらない三日月にとって、働いて金を稼ぐ以外に選択肢はなかった。

「おーいミカヅキい！そろそろ飯にしようぜー！」

「うん、いいよー」

素直で物怖じせず、仕事をしっかりこなす三日月は、思いの外、すぐに現場になじんだ。

「お？お前また野菜だけか？肉食わねーとちやんとでかくなれねーぞー？」

「いいよ、おれ肉好きじゃないし」

——この世界にきておおよそ一週間、三日月は再びギルドに足を運んでいた。

日々の生活費と相談し、ようやく登録しても問題ないほどの金を稼いだからだ。

「あーたしか・・・ミカツキさん、でしたっけ？」

受付に向かうと、ルナ、と初対面時に名乗った金色の髪をまとめた女性が立っていた。

「登録、だっけ？しにきたんだけど」

ちやんと金も持ってきた、と1,000エリスちようど入った巾着を懐から出す。

「・・・はい。登録料、しっかりいただきました。

それでは、こちらの水晶にかざしてください。あなたのステータスを調べさせていただきます」

冒険者は登録時に冒険者カードと呼ばれるアイテムを受け取る。カードには自分の名前とステータス、スキルに職業といった個人の冒険者としての情報が記されている。身分証明書となると同時に、自分の力を示す物、習得スキルの管理に必要な物となる。

手をかざし、水晶が数秒光ると、ルナは慣れた手つきで冒険者カードを作っていく——途中で、何かに気づいたような素振りを見せると、慌てて三日月に詰め寄った。

「——な、なな何ですかこのステータス!？」

「え、なんか駄目だった？」

「魔法適正0！幸運値もかなり低い！知能は人並みですが、筋力などの戦闘系ステータスの高さが尋常じゃありません！」

ここまで偏ったステータスは初めてです！と動揺したルナを落ち着かせ、次へ進む。

「このステータスだと、『ウイザード』や『プリースト』などの職業は無理ですね。『戦士』職なら上級職の——」

「——この『冒険者』、ってやつ。なに？」

「え？ああ・・・、専用のスキルを持たない代わりにあらゆるスキルを覚えることができる職業です。」

最も、スキルポイントを多く消費する上に、器用貧乏になりがちなので、最弱職などと呼ばれているのであまりお勧めは——」

「じゃあそれで」

——三日月がギルドを後にした後も、ルナは不思議な物を見たような顔でいた。ほかの職業になれるのにわざわざ『冒険者』になる者はそうはいない。それは冒険者にとっての共通認識で、ルナも同様だった。

「——ミカツキ・オーガスさん」

ルナの目に映ったのは、魔王軍を打倒する新たな光か、それとも——

「——へえ」

「気になって様子を見に来たら『冒険者』に、ねえ——」

「いったい彼はこの世界に何をもちたらすのかな——？」

Enter the first quest /
build a flag in little
wizard

三日月が最初に選んだのは、森に生える薬草の採取だった。本当は荒事のほうが羽振りもいいし慣れた仕事なのだが、金欠ゆえの装備不十分で諦めざるをえなかったのだ。

依頼書に書かれた通りの薬草を摘み取ってはカバンにつめていく。気が付くと辺りには木々がうつそうと生い茂っていた。どうやらいつの間にか森の奥に来てしまったらしい。

必要な薬草はそろったし、帰り道がわからなくなる前に戻ろうとしたその時、

——悲鳴と雄たけびが聞こえた。

——少女は走っていた。

はぐれた仲間と合流するために、そして何より背後から迫る死の恐怖から逃げるために。

黒くしなやかな体躯と凶暴性を象徴する鋭く伸びた牙と爪。地球の『虎』に酷似したそのモンスター——「初心者殺し」と呼ばれるそれは、目の前の獲物^{少女}を追いかけていた。

知能が高く狡猾なこのモンスターは、雑魚モンスターの縄張り付近に現れ、それを討伐しに来た冒険者たちを狙って狩りをする。

彼女もまた同じく、狩りの帰りに襲われた。それどころかパーティから分断され一人追いかけられるという事態に陥っていた。

『ウィザード』の彼女に初心者殺しから逃げ切る体力があるはずもなく、ほどなくして転んでしまった。

——ああ、私、死んじゃうんだ

少女の脳裏に浮かぶのは、これまでの自分の人生、仲間との思い出。

——短い人生だったなあ

少女は、これから自分に起こることから逃げるように、目をつぶった。

——っ！……？

おかしい、なぜ何も感じない？私の体はあの化け物に引き裂かれたはずじゃ？

恐る恐る瞼を開いた少女の目に映ったのは、

——目をつぶされてうなり声をあげる初心者殺しと、

「大丈夫？生きてる？」

——私の身を案じる、緑の外套を羽織った蒼い瞳の少年だった。

——声のしたほうに走った三日月の目に飛び込んできたものは、今にもモンスターに襲われそうな少女だった。

反射的に武器——安く売っていた片手剣を抜き音もなくとびかかる。

不意打ちによる目つぶしには成功したようで、相手は狙いが定まらない様子だった。

「——走るよ！」

今なら逃げ切れると踏んだ三日月は、座り込んだまま動かない少女に声をかける。

対して少女は微動だにしなかった。

「早くしないと——」

「——こ、腰が抜けちゃった……」

沈黙。

あきれれる反面、ここで見捨てるのも後味が悪いと思ったのか、三日月は少女を抱えて走ることにした。

「え!?!ちよ、ちよつと……!?!」

——相手を米俵のように肩に担ぐ、所謂「お米さま抱っこ」で。

——森をぬけ、初心者殺しが追ってこないのを確認した三日月は、少女を地面に下した。

少女はうつむいたままで、顔をうかがうことはできない。

「大丈夫？」

どこかケガしてない？と聞こうとしたところで。

——目の前の少女に抱き着かれた。

「……はっ？」

「・・・怖かった。本当に怖かった・・・！」

自分にしがみつきながら震えた声で怖かったと泣き出す少女。
どうしたことかと反応に困った三日月は、

「——ふえ？」

——少女の頭をなでることにした。

『女の子が泣いてたら男の子は慰めたりとか・・・そう！抱きしめてあげたりとか！ほら！』

思い出すのは大切な人の言葉。優しい手つきで慰められた少女は

「——あああああああ!!!」

決壊したダムのように泣き崩れた。

Bless me in the wonderful world!

アクセルの町の郊外で、向かい合う影が二つ。

緑の巨体が跳ね、小さな体でそれをかわす。

——お前楽しんでるだろ！人殺しをよお！^{カエル}

空耳である。カエルがしゃべるはずがない。

ジャイアントトードと呼ばれるこのモンスターは、人里付近に現れては、家畜や住民を舌で捕らえて飲み込んでしまう。

繁殖期になるとその数は著しく増加し、冒険者たちに討伐の依頼が出るのだ。

ちなみにその肉はたいへん美味らしく、一匹当たり五千エリスで取引される。

三日月は、単身ジャイアントトードに立ち向かっていた。

初心者殺しとの遭遇した時とは違い、装備は冒険者らしいものとなり、手に持った剣を目の前のデカイカエル^{グシオンもどき}へ向ける。

大ぶりの攻撃を最小限の動きでよけ、相手にダメージを蓄積していく。しびれを切らしたジャイアントトードは、目の前の小さな獲物を押しつぶそうと、力強く飛び上がった。

隙だらけの一撃を危なげなくかわし、そのまま背中にとりつく。

——こいつは、死んでいい奴^{カエル}だから。

相手を見失ったジャイアントトードの脳天に、剣を突き出す。打撃の利かない柔らかい体に、鋭い剣は容易に突き刺さり、ジャイアントトードは絶命した。

剣を引き抜きながら、三日月は周りを見渡す。周囲には、横たわって動かないジャイアントトードが四匹。依頼のノルマは五匹の討伐。

——三日月がこの世界にきて一年がたとうとしていた。

「ミカツキー！」

ギルドに戻るやいなや、以前助けた『ウィザード』の少女、リーンが飛びついてきた。

あの日以降、何かあればすぐに三日月に引っ付くのだ。

「おおミカヅキ、帰ってたのか」

「・・・ぺっ!」

「うおわ!?汚えぞダスト!」

リーンの背後から現れたのは、彼女の仲間である『クルセイダー』のテイラー、『剣士』のダスト、『アーチャー』のキースだ。

「おうおう見せつけてくれるじゃねえかああん?」

「・・・どうしたのさダスト」

「あいつのことは気にするな、いろいろあつて荒れてるだけだから」
ちなみにダストだけやたらと喧嘩腰である。

「あ、そうだ。これ返すよ」

そう言つて三日月はテイラーから借りていた剣を返す。

「おお。使い心地はどうだった?」

「やっぱ使いにくいや。おれはこっちのほうがいいかな」

「はいミカヅキ。これ返すね」

リーンから手渡されたのは、三日月が使うにはあまりにも大きいメイスだった。

「こいつじゃあのカエルを殺りきれないからね」

「打撃に強いもんね、ジャイアントトード」

「今回の稼ぎでいいのが買えるかな。ありがとうテイラー」

「困ったときはお互い様だろ?それにお前には借りがあるからな」

礼をする三日月に、テイラーは笑いながら返す。

「それじゃ筋が通らないよ。後でなんか手伝うから」

「・・・ミカヅキつてやたらと筋を通すことにこだわるよね」

どうしてなの?と尋ねるリーン。

「別に?ただ・・・」

「ただ?」

「・・・ううん。何でもない。じゃ」

——寝床である馬小屋へ帰る途中、三日月は不意に立ち止まった。
日はすでに沈み、空に浮かぶのは、大きく欠けた三日月。

青白く輝くその光は、まるで最初にアレを見た時のようで——

——ねえ、オルガ

三日月が思いをはせるのは、かつて自分を導き、自分の道を指し示した男。

——次はおれ、どうすればいい？

心の中でつぶやくのは、何度も彼に問いかけた言葉。

——いや、わかってる

死ぬまで生きろってオルガは最期に言った、だったらおれは最後まで命令を果たすだけだ。

——おれはここで生きる。もう一度、この手で——！

死んだ奴らと、生きてるはずの奴らに誓うように、三日月は手を空に伸ばした。

それはまるで、大切な何かをつかむようで——

——この時三日月は知らなかった。自分にとって大きな出会いが起こることを

「——ようこそ、死後の世界へ」

——邂逅の時は、近い。

Iron Blooded Brutals
クズと悪魔と、時々駄女神

俺の名前は佐藤和真。ある日、トラックトラクターに轢かれそうな女の子をかばって死んでしまった俺は、転生の間と呼ばれる場所で水の女神、アクアと出会う。異世界に転生して魔王を倒してほしいと言われた俺は、特典としてアクアを連れていき、アクセルの街にたどり着く。さあ、俺の異世界ライフの始まりだ！

——冒険者になったのはいいけど、金がなくて土木作業中です。職業？最弱職の『冒険者』ですよ。

でもまあ、汗を流して働いて、それで生計を立てるっていうのは、中々味わえるものじゃないし、これはこれで——

「おやつさーん、来たよー」

「おおミカヅキ、仕事はいいののか？」

「この間のクエストがいい稼ぎだったからね。こつちを手伝う余裕はあるよ」

誰だあいつ？見たところ俺より年下っぽいけど・・・、っていうかクエストっていったか？

「おやつさん、そいつは？」

「おお、カズマは初めてだったな。こいつは——」

「——三日月・オーガス」

「普段は冒険者やってんだがな？たまにこつちに来て仕事手伝ってくれんだよ」

へえ、冒険者の先輩ってわけか。なんかあつたら助けてもらおうかと。

「佐藤和真だ、よろしく」

「・・・ん」

——これが俺と三日月の出会いだった。

仕事が終わわり、皆で酒場で騒ぐなか、カズマはアクアを三日月に紹介する。

「私がアクアよ！よろしくね！」

———どうやらこの女神、天界で話題になった三日月のことを知らない、否、忘れた様子。

「・・・よろしく」

「で、貴方職業は何？もし上級職だったら私のパーティに入れてあげてもいいわよ？」

「おいアクア、さすがに失礼すぎるだろ」

『冒険者』だけど？」

『冒険者』 あ？あの最弱職の？」

「だから失礼だつて」

「高貴な私のパーティに入れるのは上級職の冒険者だけよ、運がなかったわね———」

「———だからさつきから失礼だつてんでんだろこのアホアがあ！」

カズマしびれを切らしてアクアをはたく。

「いったいわね！何すんのおカズマあ！」

「いいよ、別に気にしてないから」

ユージンみたいな奴だなあ、とカズマを見て思う。

「ところで二人は職業なんなの？」

「私は『アークプリースト』よ！」

「お前と同じ『冒険者』だ。なんかあつたら頼らせてくれ」

三人で談笑しながら、夜は更けていく。

「なあ三日月、今度三人でクエストいかないか？」

「別にいいけど、何で？」

「いや、俺たちまだクエストやったことないからさ、色々知ってるやつがいた方がいいかなーって」

「そういうことなら構わないよ」

よくないわよ！取り分へるじゃないのよ！ねえちよつと聞いてんの!?!とか騒ぐアクアを余所に、カズマと三日月の話は進んでいく

———これが後に、鬼畜のカズマと悪魔の三日月と呼ばれる最凶コンビになることを、まだ誰も知らなかったのであった。

中二病がパーティーに加わるようですよ？

異世界に転生した俺が出会ったのは、不思議な雰囲気をもった『冒険者』三日月。

彼をパーティーに加え、最初のクエストに挑んだ俺たちだったんだが

「うぎやあああつつつ!!死ぬ!これ死ぬからあ!」

「ぷくすくす!ちよつとカズマ受けるんですけどー!!」

——でっかいカエルに追っかけられています。

——このすばあああつ!——

「——大丈夫、カズマ?」

「お、おう・・・助かったわ三日月・・・」

息を落ち着かせながら三日月に礼を言う。

「それにしても弱すぎ、しっかりしてよ?」

「返す言葉もございません・・・」

くつそう・・・

「ちよつとカズマさん?ねえ今どんな気持ち?ねえ今どんな気持ち?」

くつそう・・・っ!

「これに懲りたら大人しく私のことを敬つたらどう?そうね、私のことをアクア様と呼んだ上で忠実な信徒になると誓つたら今までの無礼を水に流してあげてもいいのぎゅぷっ」

「って食われてんじやねえかあああああつ!!」

あんな偉そうなこと言っというてあつさり食われてんじやねえよ!

「おい三日月、三日月!」

三日月に声をかけながら振り向くと——

——ペドロの仇い!!

「うるさいなあ・・・っ!!」

くつそ向こうは向こうで取り込み中かよ!?

「カズマさあああん!助けてカジユマさあああん!!」

・・・あーもう!!

「畜生がこらあー!!」

剣を振りかざしながらアクアのもとへ走る。

何で俺がこんな目に遭ってんだよおおおっ!!

——このすばあ．．．っ!——

「ひつく、うええ．．．」

「アクアを離してこっちに向かってきたときは死んだと思ったぞ．．．!」

涙目になりながら粘液まみれになったアクアに話しかける。

「今日はこの辺で帰ろうぜ? 三日月しか戦えるやつがないんじゃない?」

「ダメよ! こんな無様な姿で帰るなんて水の女神であるこの私の顔に泥を塗ることになるじゃない!!」

すでに全身粘液まみれだけど?

「見てなさい、この私の勇姿を! ゴツドブロオオオオ!!」

そう言っただけでアクアはジャイアントトードに向かって走り出した。
なんか「相手は死ぬ!」とか言ってるが。

「．．．大丈夫かな?」

「どうした三日月?」

「いや、あのカエルってさ．．．潰れないんだよね」
「えっ」

「きゃあああー!!」

アクアが悲鳴をあげてカエルに．．．って

「なに性懲りもなく食われてんだお前はああああー!!」
「．．．はあ」

結局この日は3体討伐して終了した。

——このしゅばあ．．．——

「——あれね、仲間を増やしましょう」

「確かにそれが一番いいと思うが、当てはあんのか? 正直『冒険者』二人抱えてるパーティに誰か入ってくれるとは思えんが．．．」

．．．これ美味しいな、どんな育てかたしてるんだろう?

「大丈夫よ、私は上級職の『アークプリースト』よ? 仲間の一人や二人

向こうから『仲間にしてください』って頼んでくること間違いなしよ！」

スープか……、アトラの作ったやつが飲みたいな。

「私がいなきや誰も来ないわよ？感謝なさい。唐揚げ貰いつ」

「あつ、テメツ」

結構具がでかいなこれ、クーデリアが作ったやつみたいだ。

「いーじゃない一つくらい、器の小さい男はモテないわよー？」

「つたく……」

……ん、やっぱこれくらいでかいほうが食ってる気がするな。

——このすば——

——明くる日、

「どうして誰も来ないのよ！おかしいじゃない!？」

「いやだつてお前……」

「なによ！」

「……あれで人来るとは思えないけど」

「なんですつて!？」

三日月も同意見らしい、『アクア様のパーティにはいつてから宝くじが当たるようになりました！』とか怪しさしかないわな。俺なら絶対入らない。

「——募集の張り紙、みさせて貰いました」

声のした方に振り向くと、そこいたのは、三日月よりも小さい、とんがり帽子とローブといった、いかにも魔法使いらしい格好をした眼帯少女で——

「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法の使い手!!」

——ああ、また変なのが来た。

かえるがり

パーティを組んでクエストに向かったカズマさん一行、しかしそこに待っていたのは想像を上回る厳しい現実（アクアが役に立たないという意味で）だった。

現状を打開するために新たな仲間を募集した3人、そこに現れたのは――

「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法使いにして爆裂魔法の使い手！」

——なんか痛々しい魔女っ娘だった！

「・・・冷やかしに来たのか？」

「ち、ちがわいつ！」

めぐみんと名乗った少女の自己紹介に思わず突っ込むカズマ、DQ Nも真っ青な名前と思春期特有の感性真っ盛りな名乗りをされればそうなるのも無理はないが。

「今、紅魔族って言ったかしら」

少女にアクアが尋ねる。

「いかにも！我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん！我が爆裂魔法は山をも崩し、岩をも砕く！」

と、そこでめぐみんは一拍置き、

「・・・ところで、凶々しいのはわかっていますが、何か食べ物を恵んでくれませんか・・・？」

「いっよ」

もう三日も食べてないと言うめぐみんの切実な願いに三日月が即答する。こうやって誰かに食べ物を食わせてやるのは二人目である。もつとも当時の彼女とはそれなりに歳は離れているが。

「ところでその眼帯はどうしたんだ？ケガしているのならこいつに治してもらったらどうだ？」

「・・・フ、これは我が強大な魔力を抑えるマジックアイテム、もしこれが外れることがあればこの世に大きな災いがもたらされるだろう・・・」

「へー、封印みたいなものか」

「まあ嘘ですが、．．．単に、オシヤレでつけてるだけえ．．．っ」
．．．．．

「ああー！引つ張らないでください！ヤメツ．．．ヤメロオー！」

「．．．カズマに説明すると、彼女たち紅魔族は生まれつき高い知力と魔力を持っているわ、名前の通り紅い瞳と、変な名前を持っているの」
引つ張っていた眼帯を離すカズマ、イイツ×タイ×メガアア×と勢いよく戻ってきた眼帯の衝撃に悲鳴をあげるめぐみん。

「．．．大丈夫？」

「あ、ありがとうございます．．．。変な名前とは失礼な、私から言わせれば、街の人たちの方が変な名前だと思うのです」

「．．．ちなみに、両親の名前は？」

「母はゆいゆい、父はひよいぎぶろー！」

．．．．．

「．．．とりあえず、この子の種族は優秀な魔法使いが多いんだよな？
仲間にしてもいいか？」

「二人がいいなら、おれは別に」

「おい、私の両親の名前について言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」

——ひよいぎぶろおおー——

「爆裂魔法は最強の魔法、その分魔法の準備に時間がかかります。こちらの用意ができるまで、カエルの足止めをお願いします」

「わかった、俺たちは近い方をやる、おいアクア、お前一応は元なんたらなんだろ？たまには元なんたらの力を見せてくれよ」

「元つて何よ！現在進行形で女神よ私は！『アークプリースト』は仮の姿よお！」

涙目になりながら帰るに突っ込むアクア、違うそうじゃないと思わずツツコミたくなるカズマ。

「女神？アクアは一体何を言ってるのですか？」

「あんまり気にしない方がいいと思う」

見るからにわかるほどの神聖な光を拳から放ちながらカエルめが

けて突進したアクアは――

『ゴオオオツドレクイエムウウー』!!』

――昨日と同じようにその拳をカエルにたたきつけた

『「……………」』

「…………カエルって案外かわいいと思うのぎゅぷっ」

アクア、再びカエルに食われる。どうやら文字通り身を挺して時間を稼いでくれるらしい。

そうこうしているうちに、めぐみんが構えた杖の先に巨大な魔方陣が描かれる、どうやらこちらの準備は整ったようだ。

「見ていてください、これが人類が放てる最強の魔法…………」

小さな太陽と見間違える真紅の光が一瞬強く輝き――

『「エクスプロージョン」っ!!』

一閃、すべてを吹き飛ばす爆焰が辺りを包み込む。視界が回復するころには、カエルがいた痕跡は周辺の地面もろとも消滅していた。

「…………これが、爆裂魔法…………」

「なんつー威力だよ…………!?!」

言葉を失う三日月とカズマ、その時地面から新たなカエルがはい出した。

地面の中にいたところを、先の爆音を聞いて現れたようだ。

まっすぐめぐみんに向かって動き出すカエルを見て、カズマは慌てて声を荒げる。

「めぐみんー! いったん離れて、距離をとつてもう一度攻撃を…………!?!」

そこから先は言葉がつかなくなかった。

「ふ…………、我が爆裂魔法は強大ゆえに膨大な量の魔力を消費する…………。つまり、魔力切れで動けません、助けて下さあ…………」

地面に伏せながら息も絶え絶えといった風にとんでもないことを暴露したと同時にカエルに食われためぐみん。

アクアとめぐみん、二人の尊い命を犠牲にしながら、カズマの最初のクエストは成功という形で終わったのだった。

5人目の仲間はマゾクルセイダー

—前回のあらすじ—

ジャイアントトードを狩るために仲間を募集したカズマ、アクア、ミカヅキ。

そこに現れたのは頭のおかしい紅魔族の『アークウィザード』、めぐみんだった。

最強の攻撃魔法、『爆裂魔法』を使う彼女に期待を寄せたカズマたちだったが——

「ふ……、我が爆裂魔法は強大ゆえに膨大な魔力を消費する……。つまり、魔力切れで動けません、助けて下さあつ……」

めぐみんは一日に一度しか爆裂魔法を放てないのだった！

何とかジャイアントトードを討伐しクエストを成功させたカズマたちだが……

—このすばっ！—

「うっ……、うええ……。生臭いよう……」

「……カエルの体内って臭いけどいい具合に温かいんですね……」

「……二人とも大丈夫……?」

三日月におぶられながらアクアと同じくカエルの粘液まみれで知りたくもない知識を教えてくださいめぐみん。

曰く、魔法使いは自分の魔力量を上回る魔力を消費しようとするとき足りない分を生命力で補うのだそうだ。

魔力が足りない状態で魔法を使うと、下手すれば命に関わるらしい。

「今後、緊急時以外では爆裂魔法は禁止な。ほかの魔法で頑張ってくれよ、めぐみん」

カズマの言葉を聞いためぐみんは、三日月の肩をつかむ力を強くしたかと思うと、

「……使えません」

「……はっ。」

「私は、爆裂魔法しか使えません、ほかの魔法は一切覚えていませんか

ら」

本日二度目の爆弾発言をかましたのだった。

「・・・マジで?」

「マジです、大マジです」

ぐずっていたアクアが話に加わる。

「爆裂魔法しか使えないってどういうこと? 爆裂魔法を習得できるほどの『スキルポイント』があればほかの魔法なんて簡単に習得できるでしょう?」

スキルポイントとは、この世界の冒険者たちがスキルを覚えるために必要とするもので、冒険者カードに最初から割り振られたポイントと、レベルを上げることで手に入るポイントの2種類が存在する。スキルに見合ったポイントを消費することで、それを習得できるのだ。手に入るポイント、スキルを覚えるのに消費するポイントには個人差があり、才能があればあるほど多くのポイントを取得し、少ないポイントでスキルを習得できるのだが――

アクアのカズマへのスキルポイントの説明が終わり(途中、宴会芸スキルとかいう使いどころのわからないスキルをアクアが覚えてるのが発覚したが)、めぐみんがぼつりと呟いた。

「・・・私は、爆裂魔法をこよなく愛する『アークウィザード』、爆発系統の魔法が好きなのではなく、爆裂魔法だけが好きなのです」

「もちろん、ほかの魔法を覚えれば楽に冒険できるでしょう。・・・でも、ダメなのです。例え一日一回しか撃てないとしても、例え使ったあとは倒れるとしても、それでも私は爆裂魔法しか愛せない! なぜなら私は、爆裂魔法を覚えるためだけに『アークウィザード』になったのだから!」

「素晴らしい! 素晴らしいわめぐみん! そのロマンを追い求める姿勢、私感動したわ!」

めぐみんの告白にアクアが同調する。三日月もさして文句を言うつもりはないみたいだ。

このまま勢いに任せたまま進めるとまずいと勘付いたカズマは、話を切り上げるために口を開く。

「そうか、茨の道だと思うが頑張ってくれ応援するから。よし、今回の報酬は山分けな、うん、機会があればまたどこかでパーティを組むこともあるだろ」

「・・・ふ。我が望みは爆裂魔法を放つことのみ、報酬などおまけにすぎません。なんなら山分けではなく、食費とお風呂とその他雑費だけもらえるなら、報酬はなしでもいいと考えている。そう！爆裂魔法を使える『アークウィザード』が、今なら食費と少しのお金だけで仲間になる！これはもう長期契約しかないんじゃないだろうか！」

「いやいやいや！俺たち駆け出しパーティには君みたいな人材は宝の持ち腐れだつて！ほら、俺たち『冒険者』2人に役に立たない『アークプリースト』しかないしきー！」

「いえいえいえ、私も駆け出し、まだレベルも6です。もう少しレベルが上がれば撃つても倒れなくなりますから、だから私を引きはがそうとしないでください」

「いやいやいや、一日一発しか撃てない魔法使いとか、使い勝手悪すぎだから・・・っ！くっ、こいつ魔法使いのくせして意外な握力を・・・！っていうかお前、おそらくほかのパーティにも捨てられたとかだろ！そもそもダンジョンとかじゃ完全に役立たずだろ。お、おい放せつて！ちゃんと今回の報酬は山分けしてやるから！」

「いやです！見捨てないでください！もうどこのパーティも拾ってくれないのです！荷物持ちでも何でもしますから見捨てないでくださいー！」

「ちよつとカズマ！私が役立たずだつてどーいうことよ!?!」

実際にカオス。街の中で騒いでいれば人目に付くのは必然なわけ
で・・・

「ちよつと見て、あの男あんな小さな娘を捨てようとしてるわよ・・・」
「やーねえ」

「しかもなんか隣の女の子もぬるぬるしてるし・・・なんかのプレイかしら・・・」

「憲兵さん呼んだほうがいいんじゃないの・・・?」

・・・まさかのプレイ事案疑惑である。それを聞いたためぐみんは

「お願いします！どんなプレイもやりますから！例えばそう、きつきのカエルを使ったぬるぬるプレイとか——」

「よし分かったこれからよろしくな」

めぐみん が 仲間 に なった！▼

—このすば—

「つたく・・・今日は散々な目に合った・・・」

冒険者ギルドについた一行は、ギルドの受付でクエスト達成の報告と報酬の受け取りを済ませうことにした。ちなみに女性陣は入浴中である。あの格好のままであらぬ誤解を受けたらたまらないし。

達成報酬とカエルの取引代は、移送費を引いて13万エリス、命がけで働いて一人頭3万ちよつとという現実はずまにとってはあまりにも残酷すぎた。

「俺、ここでちゃんと生活できるか不安になってきたんだけど・・・」

「・・・(CGS時代はこんなもんだったっけか・・・)」

他に安全なクエストはないものかと先ほど掲示板を確認してきたが、職業を指定していたり、魔法の実験相手がほしいなどのカズマには無理なクエストしかなかった。

「なあ三日月、お前パーティ組んでくれそうな知り合いいないか？どう考えても俺たちだけじゃあの2人の手綱は握れないんだが・・・」

「・・・そこそこ知り合いはいるけど、大体みんなパーティを組んでるか・・・少なくとも、一気に4人転がり込んででも許してくれる奴は・・・」

ですよねーだって俺たち『冒険者』だもんねー、と机に突っ伏すカズマ。ちやつかり三日月を巻き込みながら、どうやって仲間を増やしたのかと考えていると、

「・・・あっ」

「・・・どうした三日月」

「いるかも、パーティに入ってくれそうな知り合い」

「おいマジかよ紹介してくれよ今すぐ！」

「あ、いや、でも・・・」

「アイツを紹介するのはなあ・・・」「いいから、この際多少の問題点には目を瞑るから！」と三日月とカズマが話していると、

「・・・すまない、ちよつといいだろうか？」

そこに現れたのは、

「え?」「あ」

「この募集は、あなたのパーティのものだろうか、少し話を聞いていたのだが・・・」

「え、ああ・・・、はい・・・」 「ええ・・・」

思わず2度見してしまうほどの美貌を持った・・・、

「ぜひとも私も加えさせてほしいのだが・・・」

金髪の、どこか高貴なオーラを漂わせた、いかにも『騎士』といった格好の美女だった。

(向こうから来ちゃったよ・・・)

・・・あれ、デジャビュ?

I s t h i s c r u s a i d e r M a s o c h i s t ? / 三日月・オーガス

—前回までの『この素晴らしい世界で本当の居場所を!』—

「我が名はめぐみん!、紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法の使い手!」

爆裂魔法(のみ)を操る頭のおかしい紅魔族の少女、めぐみんが仲間になった!

「俺、ここでちゃんと生活できるか心配になってきたんだけど・・・」
無事?最初のクエストをクリアするが、先行く不安に頭を抱えるカズマ!

「・・・すまない、ちよつといいだろうか」

(向こうから来ちゃったよ・・・)

?
そこに現れた三日月の知り合いらしき女性の真意とはいったい・・・?

—・・・このすば—

カズマと今後のことについて話していたところに突然現れたせいつ——さつきカズマに言っていたパーティに入ってくれそうなやつ——を見て、おれは頭痛がしたような気がした。

「あ、えと、その・・・、な、なんでしょうか・・・?」

「うむ、この募集はあなたのパーティのものだろうか?もう人の募集はしていないのだろうか・・・む?ミカツキか、そうか、見覚えのある顔だと思ったらお前だったか」

どうやらさつきまでおれに気づいていなかったらしい。

「どうしてって・・・、おれもカズマとパーティ組んでるってだけだ」

「基本的に一人で狩りをしてたお前がか?・・・ふむ、これはますます興味ที่わいたな・・・」

「えっ・・・と・・・、その、二人は知り合いで・・・?」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな・・・、ダクネスだ、よろしく頼む」

・・・いや、よろしくも何も話すら聞いてないんだけど・・・。
—この、す、ぼっ！—

「・・・で、何の用？募集の張り紙を見たって言ってたけど・・・」
「あー・・・、パーティーメンバーは募集してますよ？あまりおすすめできませんが・・・」

遠回しに「うちのパーティーやばいから入らない方がいいよ」というカズマ。普通の人ならそもそも『冒険者』が二人もいるパーティーに入ろうとは思わないわけだけど——

「ぜひ私をーぜひ、私をこのパーティーに！」

——こいつも普通じゃないからなあ・・・

「い、いやいやいややめといた方がいいですって！いろいろ問題だらけのパーティーなんですよ、最弱職とポンコツしかないし、さつきも仲間二人が粘液まみれに——」

「——や、やはり、さつきのはあなたのパーティーだったか！いったい何があったらあんな風に・・・、わ、私も・・・、私もあんな風に・・・！」

「えっ」

引かれると思ったのに逆に惹かれてるダクネスにカズマが引く。

「・・・いや違う。年端もいかない少女があんな目にあうなんて『クルセイダー』として放っておけん！どうだろうか、わたしも上級職だし募集要項にも当てはまるのだが」

ようやくカズマが「こいつはやばい！」と気づいたのか、視線を俺に向ける。

（なんなんだよこの人!?アクアやめぐみんと同じ気配を感じるんだが!?）

（さつき仲間にあてがあるって言ってたでしょ？それがこいつ）

（おいちよつと待て、おまえこんな人を紹介しようとしたのか・・・!?）

（だからやめといた方がいいって言ってたでしょ？それにカズマも

『多少の問題には目を瞑る』って……」

(こんな地雷とは聞いてねーよ!……くっ、こうなったら……!)
「いや、本当にやめといた方がいいですって、聞いての通り俺たち二人は『冒険者』ですし、ほかの仲間も何の役に立つかわからない『アークプリースト』と一日一発しか魔法を放てない『アークウィザード』のポンコツパーティなんで、ほかをあたることをお勧めしま——」

「ちようどいい、……その、言いづらいのだが……、私は耐久力と防御力には秀でているのだが、攻撃が当たらなくてな、ほかにパーティを組んでくれる者がいないんだ」

「ほんとそれでよく上級職になれたよね、防御にしか役に立たないじゃん」

「ああんっ……!というわけで、上級職だからと言って気を遣わなくていい、むしろ盾代わりとしてこき使ってくれ」

「いや、うちのパーティほんと貧弱だから、ほとんどの攻撃あなたにまわってるくるから」

「望むところだ」

「……今日だって仲間がカエルに食われて」

「望むところだっ!」

もはや反論する気力もなくなったのか、カズマがうなだれる。おれ?無理、ああなったダクネスは絶対止められないし……。そういえばギルドの奴らがダクネスのことを「どえむ」って言ってたけどどういう意味なんだろう?

——このすばっ!——

「どうしたのよカズマ、急に改まっちゃって」

「この際はつきりしとこうと思ってな」

風呂から上がったアクアとめぐみんを加え、カズマたち5人はテーブルを囲んでいた。ちなみにカズマとアクアが同じ側、その向こうにめぐみん、三日月、ダクネスの順で座っている。

「今のうちに言っとくぞ、俺たちは将来的には魔王を倒すつもりでいる。正直自分でも無茶で無謀だとはわかっているが、それでも俺たちには魔王を倒さなきゃいけない理由がある。おいめぐみん、いいのか

？一日一発しか魔法が打てないような魔法使いが魔王に挑んで勝てると思うか？降りるなら今の内だぞ——」

魔王を倒すという目的を掲げること、自分がそんなことできるはずがないと思わせ、自分からパーティを抜けてもらおうというのがカズマの魂胆。だが……

「——いいじゃないですか、魔王を倒した爆裂魔法使いとその仲間、紅魔族的にすごくポイント高いですよっつー！」

残念ながらもぐみんには逆効果だったようだ。

「……おいダクネス、お前は良いのか？防御しかできないとか向こうにとつては都合のいいサンドバッグにしか思われなだらうし、下手すれば奴らにつかまって——」

「——いいじゃないか、むしろ望むところだ。騎士として魔王を打倒せんとする者を放っておけんしな。べ、べつに魔王軍から辱めを受けられるとか思っていないぞ？つかまってあんなことやこんなことをされるんじゃないかか思っていないからな、うん」

同じくダクネスにも逆効果らしい。

「……なあ三日月、お前は どうする？別にわざわざ付き合わなくたっていいんだぞ？」

お前に負担を強いることになるし……、とカズマにしては珍しく他人の身を案じる。彼にいてもらえば心強いというのが本音だが、一日二日パーティを組んだだけの三日月にそんな役目を押し付けるのは気が引けるといいうのも本音。いややっぱ引き込んだ方が、いやでも、と悩むカズマ。しかし三日月は——

「——うん、いいよ。おれもこのままカズマという」
あつさりとした態度で、カズマに答えるのだった。

「……いいのか？正直これからもお前に頼りっぱなしになると思うぞ」「そこはちゃんと強くなってもらうつもりだし。なんかカズマといると楽しそうだなって思った。それに……」

「おれにもあるから、魔王つてのを倒す理由」

——アイツらと約束に頼まれしたから、魔王を倒してほしいって、絶対に止まらないって、だから——

「——だから、これからもよろしく、カズマ」
「・・・おう」

マズとパンツと飛ぶキャベツ、の後半

―前回までのあらすじ―

「ぜひ私を！ぜひ、私をこのパーティに！」

アクア、めぐみんに続いて変態チックなクルセイダー「ダクネス」が仲間になった！

「おれにもあるから、魔王つてのを倒す理由」

「魔王を倒す」という目的のもと、カズマといることを決める三日月。

歩く歩幅は異なれど、向かうゴールは同じ5人、今ここに、人類を救うべく魔王に立ち向かう新たな勇者たちが立ち上がった！

「なあ、スキルつてどうやって習得するんだ？」

カエルを討伐し皆の意思を確かめた夜から一夜明けた次の日、ギルドで遅めの昼食を摂っていたカズマは、一緒に食っているアクア、めぐみん、三日月に尋ねる。

「スキルの習得？そんなものスキルカードに記されているスキルから・・・、ああ、そういえばカズマは『冒険者』でしたね」

『冒険者』は他の職業の奴にスキルを教えてもらって、それで覚えることができるんだ」

「だから全てのスキルを覚えることができるんです、まあ割り振るスキルポイントは本職に比べて多いんですが」

めぐみん、三日月がカズマに説明する。

「へー、つてことはめぐみんに教えてもらえば俺も爆裂魔法を使えるようになるのか」

「その通りですっ！」

「うおっ」

「その通りですカズマ！必要になるスキルポイントはバカみたいに多いですが、『アークウィザード』を除いて唯一爆裂魔法を使えるのが『冒険者』です。爆裂魔法を覚えたいのならいくらでも教えます。と、どうか覚えましょう。ほかに覚える価値のあるスキルなんてあるのでしょうか、いやない！さあ！私と一緒に爆裂道を歩もうじゃないですか！」

「おちついてめぐみん、少なくとも今のカズマじゃ無理だと思う」

「・・・そうなのか？」

「うん」

「そうね、『冒険者』が爆裂魔法を覚えようとしたら、10年ぐらいスキルポイントを何も使わずずっと貯めてようやくつてところじゃないかしら」

「待てるかそんなもん。・・・なあアクア、お前なんか役に立つスキル覚えてないか？」

「しよーがないわねー、私のスキルは半端じゃないわよ？本来なら誰かに教えていいスキルじゃないんだから、そこちゃんと覚えておきなさいよね」

何やらもつたいぶった様子で答えるアクア。水の入ったコップを持つようカズマに言うと、スキルの説明を始めた。

「この種をコップに入れるのよ。そうすると中の水を吸った種はよきによきと——」

「誰が宴会芸スキル教えろつったこの駄女神があー！」

ちなみに宴会芸スキルの習得には5ポイント必要です。

——このすば——

「・・・つたく・・・、そういや三日月は何のスキルを覚えてるんだ？」
「知り合いの職業が結構ばらけてるからいろいろと教えてもらった。ダクネスとかから前衛職向けのスキルとあとは——」

「——ねえ、君がダクネスと三日月が組んだっていう人？有能なスキルがほしいなら『盗賊』のスキルはどうかかな？」

突然隣から声をかけられる。隣のテーブルにいたのはダクネスと身軽そうな衣装で身を包んだ銀髪の女性だった。

「ヤッホーミカツキ♪」

「クリスじゃん、どうしたの」

「いやー、ダクネスが「ミカツキと一緒にパーティに加入した」っていうもんだからさ、お姉さんとしては相手がどんな人か気になるじゃない？」

「紹介する、私とミカツキの友人で『盗賊』の——」

「『クリス』だよ、よろしく！」

「あ、よろしくお願ひします。．．．えっと、『盗賊』スキルってどんなのがあるんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！『盗賊』スキルは便利だよ、敵感知に罠感知、潜伏とか窃盗とか、覚えておいて損はないスキルばかり！ついでに言うとな必要なポイントも少なくてすむ！どう？今ならクリムゾンビア一杯とお安くしとくよ？」

「そりやいいや、おーい！この人にクリムゾンビア一つー！」

——このすばっ！——

「——で、なにがあつたの？」

カズマにスキルを教えると言つて路地裏へ向かつたクリスだったが、涙目になつて帰つてきた。

「えぐつ．．．、窃盗スティースキルを教えて実践させてみたら．．．、パ、パンツ盗られて．．．、返してつて言つたら金払えつて言われて．．．」

「いや返してほしかつたらパンツの価値分の金を払えつて言つただけだよ？ホントだよ？」

「お金払つたら」お前がこのパンツにかける価値はそんなもんか？」つて言われて．．．！」

「．．．」

「あの、無言でこつち見つめるのやめてくれませんか？」

「はあ．．．、ほらクリス、元気出して」

「うん．．．、つて！ミカツキ!?こ、これつて．．．!?」

「え、おれの財布だけど？ああ中身とつたら返してね。それリーンからもらつたやつだから」

「いやそうじゃなくつて！ミカツキがこんなことする必要なんて．．．！」

「別にそこまで必要なわけじゃないし、一応カズマは仲間だから。仲間のやったことにけじめをつけるのは大事でしょ」

女の子が泣いてたら慰めろつて言われたしね、と三日月。

「．．．もう、お金は大事にしなきゃだめだよ？」

「あれ、いいの？」

「お金がないからって誰かにたかるのはダメでしょ、しかも友達からなんてもつてのほか！いつまでもめそめそして弟分に心配かけてちや情けないしねー！」

「じゃあ私稼ぎに言ってくるから！とその場を後にするクリス。」

「・・・お前ってフェミニストだったのな」

クリスが見えなくなると、カズマが三日月に話しかける。

「その『ふえみにすと』ってやつがどんなのかは知らないけど、名瀬とアトラから「女の子は大事にしろ」って言われたから」

「いやまあそれはそうだろうが・・・、てかお前、それで有り金全部渡したらどうするつもりだったんだ？誰かに借りるつもりだったのか？」

「安いクエストでも飯代くらいは何とかなるし」

それに・・・、と三日月

「もうすぐ『アレ』の時期だしね」

『『アレ』？一体——』

なんだよ、と続けようとしたカズマの声を遮って聞こえてきたのは

『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中の冒険者たちは、至急ギルドに集合してください！繰り返し——』

「今年も来たね、『キャベツ狩り』・・・！」

——このすば——

「・・・キャベツってあれだよな、野菜だよな？」

「そうですよカズマ、緑で丸いあのキャベツです」

「ああ、噛むとシャキシャキしてて美味しいあのキャベツだ」

「んなこと知つとるわ！じゃあなにか？緊急クエストとか言ってるのはキャベツの収穫か!？」

「あー・・・、カズマは知らないんでしょうね・・・。カズマ、このキャベツはね——」

「皆さん！お集まりいただきありがとうございます！もうお気づきかと思いますが、今年もキャベツの収穫時期がやってきました！今年の

は出来が良く、1玉1万エリスとさせていただきます！すでに住民の皆さんには避難していただいております。この檻の中にできるだけ多くのキャベツを捕まえて収めてください！尚、今回の報酬は後日まとめてのお支払いとさせていただきます——」

「——飛ぶんだ、ここのキャベツ」

職員に遮られたアクアの話をつづけた三日月の言葉は、日本人のカズマにとっては理解の範疇を超えていた。

——このすば……—

「——うぐああああ！」

——拜啓、父さん、母さん、元気にしていますか

「——くそっ！仲間がやられた！」

——俺はこのファンタジーじみた世界で変な仲間と元気に暮らしています

「——どきなさい！このキャベツで一山あてるんだから！」

——役に立たない元女神の『アークプリースト』、頭のおかしい『アークウィザード』、どこか危ない匂いを感じる『クルセイダー』、それと強くて優しくて頼りになる『冒険者』の仲間とともに、日々クエストに挑んでいます

「——ああ、いい、いいぞ！もつとだ、もつと来い！」

——ちなみに今の天気は

「はああっ——！！」

——曇り時々キャベツです。

——日本に帰りたい……—

「なぜたかがキャベツ炒めがこんなにうまいんだ。納得いかねえ、全っ然納得いかねえ……！」

キャベツ狩りが終わった夜、街のいたるところでキャベツ料理がふるまわれていた。

羽振りがいいのでクエストに参加したカズマだったが、軽く後悔しているようだ。

「でもすごかったよカズマ、教えてもらってばかりの『盗賊』スキルをあんな風に使いこなすなんて」

「うむ、私がキャベツに囲まれ袋たたきにされていた時など、さっそうと現れるや否や襲い掛かるキャベツを次々と収獲していったからな。礼を言う」

「確かに、潜伏スキルで気配を消しながらステイルでキャベツを捕まえるその姿はさながら暗殺者アサシンのようでした」

「カズマ……、私の名において、あなたに『華麗なるキャベツ泥棒』の二つ名を——」

「やっかましいわあ！」

これはアンデッドですか？いいえ、リッチーです

——前回までのあらすじ——

「——ねえ、君がダクネスとミカツキが組んだっていう人？」

新たにダクネスをパーティに加えたカズマは、銀髪の『盗賊』、クリスと出会う

「——飛ぶんだ、ここのキャベツ」

クリスからスキルを教わり、緊急クエストであるキャベツ狩りをクリアする

今回はどんな騒動が待っているのやら・・・

カズマのレベルが6になった。

キャベツを捕まえただけでレベルが上がるのかとか、キャベツにそんな経験値があるのかとか、いろいろと突っ込みたいことはあるのだが、そんなこと今に始まったことではないので、スルーすることにする。新たに片手剣スキルと初級魔法を習得し、装備も新しくしたカズマは、次のクエストの相談をするのだが・・・

「——クエストを受けるのなら、アクアのレベルを上げられるようなものにはしないか？」

『『プリースト』は主に後衛職ゆえに一般的にレベル上げは難しい。アンデッドなら『プリースト』が容易に討伐できるし、いいと思うのだが・・・』

ダクネスのアクアのレベル上げをしようという提案に乗った一行は、ちょうど郊外の共同墓地に現れるというゾンビメーカーの討伐クエストを受注した。

——このすば——

アンデッドメーカーが現れるのは夜なので、俺たちは墓地の近くで夜まで待つことにした。覚えてたの初級魔法の一つ、「クリエイト・ウォーター」と「ティンダー」でコーヒーを作る。

「カズマ、私にもお水ください。て言うか、なんでそんな初級魔法を使いきこなしているんですか。本来使い道なんてないようなスキルのは

ずなのに、カズマを見てるとすごく便利そうなんですが」

「こういう使い方なんじゃないのかこれ？　そういやこの『クリエイト・アース』って何に使うんだ？」

唱えても出てくるのは岩とか石ではなく土、攻撃にほとんど使えないからって土をどうやって使えと？」

「・・・えっと、その土は、畑などに使うと良い作物がとれるようですよ。・・・それだけのようですよ」

「・・・めぐみん、それホント？」

「何々、カズマさん農家にでもなるの!?　水も土も出せるとか転職じゃないですか！　プークスクス！」

なにやら煽ってくるアクアにむかついたので、土を乗せたままの左手を向けて

『ウインドブレス』！』

「ギャー！　目が、目があー！」

風の初級魔法で飛ばした土がもろに目に入ったアクアが地面をのたうち回る。

「・・・なるほど、こういう魔法か」

「いや違いますから！　なんでそんな本職よりも器用に使いこなしてるんですかっ！」

「カズマ、おれいつか畑作るから、その時にその土貸してくれない？」

——このすばあ——

「・・・ねえカズマ、今回の依頼ってゾンビメーカーの討伐よね？　なんかそんなのよりも大物が出そうな予感がするんですけど・・・」

「おいフラグ建てんな、親玉のゾンビメーカーを討伐、取り巻きのゾンビもきっちり成仏させる、想定外のことが起こったら迷わず引き返す、いいな？」

『さくせん：いのちをだいに』を選択した一行は、敵感知のスキルをクリスから習ったカズマと三日月を先頭に墓地に向かった。

「・・・ん？」

「敵感知に反応・・・、これは・・・」

ほぼ同時に異変を察知した二人、ゾンビメーカーを捕捉したのかと

思ったが

「ゾンビの反応が、1匹、2匹、3匹・・・？」

「どんどん増えてる・・・、ゾンビメーカーじゃない？」

墓場の近くまで来ると、中心で魔方陣とその隣にたたずむ人影が見えた

動揺するめぐみん、『アークプリースト』がいるなら問題はないだろうと言うダクネス、どうしたものかと考えるカズマと三日月、その均衡を破ったのはやはりというか

「——あああああ——！」

トランプルメーカー筆頭
アークアだった。

「リッチーがこんなところに出るなんてっ、成敗してやる！」

リッチー、ノーライフキング、アンデッドの王とも呼ばれる大物モンスター、少なくともアークアの言う通りこんなところに現れるはずのない大ボス級のモンスターなのだが・・・

「やめ、やめてください！誰なんですか!?!突然現れて、どうして私の魔方陣を壊そうとするんですか!?!」

「うるさいアンデッド!どうせこの魔方陣で何かよからぬことでもやろうとしてたんでしょ!」

「やーめーてー!」

・・・なんか、威厳なくない？

『ターンアンデッド』——！」

「きゃあああー!?!やめて、消えちやう、成仏しちやう!らめえー!」

——アンデッド死すべし、慈悲はない!——

「——えーっと、ウイズって言ったか?話をまとめると、あんたはこの墓地でさまよっている魂を天に還している・・・と?」

「は、はい・・・」

暴走するアークアをなだめた後、件のリッチー——ウイズに話を聞くと、死者の声が聞こえる彼女は、ろくに葬式も上げてもらえなかったこの墓地に眠る魂を定期的に成仏させてあげている、ということらしい。

「その話がホントだとして、どうしてあんたが?『プリースト』なんて

探せば街にいくらでもいるのに・・・」

「その・・・、この街の『プリースト』の方々は拝金主義といいますが、お金のない人たちの成仏は後回しといいますが、その・・・」

一同の視線がアークアに集まる、目をそらされた。

「それはしようがないとして・・・、ゾンビを起こすのはどうにかならないか？俺たち、ゾンビメーカーを討伐してくれってクエストを受けてきたんだが・・・」

「えーっと・・・、私が起こしているんじゃないかと、ここに眠っている体の残っている魂たちが、私に反応して勝手に目覚めちゃうみたいなんです・・・。えと、その・・・、どうしましょう・・・？」

結局、墓地の魂の成仏はアークアが引き受けるということで話はましまりウイズはその場から去っていった。その時に街で魔道具店を営んでいるというので、住所が書かれた紙と名刺をもらった。

「リッチーしか覚えてないスキルなどもあるので、よろしければ遊びに来てください！」

ちなみに、帰り道の途中までクエストを達成していないことに気づかなかったことは、言うまでもないだろう。

1面のボスってたいてい初期装備で無策でもなんとかなるよね

—前回のあらすじ—

アクアの知力を上げるためゾンビメーカーを討伐しに行ったカズマたち、そこにいたのは、優しいがどこか威厳のないリッチー、ウィズだった。

夜な夜な墓地の魂を還していたが、かえってそれがゾンビを生みだしていたらしい。

アクアが代わりに成仏を行うということで落ち着いた一行は、そのまま墓地を後にしたのだった。

「・・・あれ？アクアのレベル上げは？」

「「「あつ」」」

——当初の目的を完全に忘れて

—こ、の、す、ばっ！—

「どうだ二人とも、キャベツ狩りの報酬で修理に出していた鎧を強化してみたんだが・・・に、似合っているか？」

「成金趣味のお偉いさんがつけてそうな鎧だと思う」

「・・・私だつてたまには素直にはめてもらいたいのだが・・・」

「普段の行いの所為じゃない？」

キャベツ狩りの報酬が参加した冒険者全員に配られた。昼間から酒を飲み明かす者、装備を新しくした者、借金の返済にあてる者、貯金する者、皆思うままに報酬を使っていた。

「ハア・・・ハア・・・、こ、このマナタイトでできた杖の艶・・・！
たまりません・・・！」 ↑装備の新調

「・・・うん、もう少しかな」 ↑貯金

「ちよつとおお！なんで私は5万ぽつちなよ！10や20じゃきかない数はとつたわよ！」 ↑借金のカタ

アクアがとつていたのはレタスだったそうです。

—このすばあぁ！—

「早速クエストに行きましよう、それもなるべく雑魚が多いやつを！新しい杖の威力を見せてあげます！」

「いいえ金になるクエストを選ぶべきだわ！ツケで今夜のご飯代もないんだもの！」

「ここは強敵の出るクエストをだな、一撃が重くて気持ちいいやつを——！」

「落ち着けお前ら！掲示板を確認せんことにはだな……」

「……カズマ、ダクネスが喜びそうなのしか残ってないよ？」

三日月の言う通り、掲示板に貼ってあったのは彼らの手には余る難易度のクエストばかり、これはどうしたことかとルナに話を聞いてみると

「——魔王軍の幹部?!」

「ええ、ここから少し離れた廃城に住み着いたとかで……、その影響か、近辺の弱いモンスターは姿を消してしまっていて……首都に応援を頼んでいます、解決するまではそこにあるクエストしか……」

あ、アクアが膝から崩れ落ちた

——このすばあ……

「……そういうわけで、まともなクエストが張り出されるようになるまで、私に付き合ってくださいませんか？」

「別にいいけど……、付き合うって何するの？」

早朝、三日月はめぐみに連れられて街の外を散歩していた。散歩という名目で付き合ったわけだが、どうやら別の意図があるらしい。

「爆裂魔法を撃てないので、こういろいろと、内にたまつていくものがあります……、何か迷惑をかけずに爆裂魔法を撃つても大丈夫そうなのを……、あ、あれなんていいんじゃないですか？」

めぐみんが見つけたのは誰も使っていないさそうな寂れた城。早速詠唱を始めるめぐみん。

「……ん？何か忘れてるような……」

『『エクスペロージョン』っ!!』

爆焰、地震でも起きたのかと思うほどの地響きが辺りに鳴り響く。

「あれ？あれだけの威力でも壊れないんだ」

「……すみません、帰りはおぶってもらえませんか……？」
爆裂魔法を撃ちたいから、帰り道の足になってほしい、ということらしい。

特にやることもないので付き合うことになった爆裂散歩は、1週間ほど続いた。

——このすば——

「緊急！緊急！冒険者の皆さんは、すぐに装備を整えて街の正門に集まってください！」

さあきようも爆裂に出かけるか、と支度と腹ごしらえを終わらせたある朝のこと、平和な朝の風景を切り裂くような報せ。

向かった正門の先にいたのは——

「……俺は、先日この近くに越してきた魔王軍の幹部の者だが……」

——漆黒の馬にまたがった、片手に己の首を抱えた騎士、

「ま、ままま毎日毎日！お、お俺の城に毎日欠かさず爆裂魔法を撃ちこんでくる、頭のおかしい魔法使いは誰だああー！！」

——デユラハンが、そこにいた

魔王軍幹部、ベルディア

―前回のあらすじ―

レタス収穫↓借金返済不可↓魔王軍幹部のせいでクエストがない、の3連コンボに絶望に打ちひしがれるアクア。

することがないので三日月を引き連れて爆裂散歩をはじめためぐみん。

特に出番のなかったカズマとダクネス。

皆自分の思い思いに生活する中、魔王軍の幹部、ベルディアが現れた！

「ま、ままま毎日毎日毎日！お、おお俺の城に爆裂魔法毎日欠かさずを撃ちこんでくる、頭のおかしい魔法使いは誰だああー！！」

爆裂魔法・・・だと!?

その場にいた全員が頭のおかしい爆裂魔法使いに目を向ける。周囲から冷たい視線を受けたためぐみんは、自分の近くにいた魔法使いの女の子に視線を誘導させた。

「ひいつ!?わ、私じゃないから！私爆裂魔法なんて使えないからあー！」

(・・・おい！まさかお前らが毎日爆裂魔法を撃ちこみに行ってたのって・・・!)

(みたいだね・・・、ごめん、忘れてた)

(忘れてたってお前なあ!)

さすがに観念したのか、めぐみんが前に出た。三日月も後に続く。

「お前が・・・！お前がおれの城に爆裂魔法を撃ちこんでた頭のおかしい魔法使いか！俺が魔王軍幹部だと知っての狼藉なら、堂々と城に攻めてこい！雑魚しかないと放っておけば毎日毎日ポンポンポンと撃ちこみおって！頭おかしいんじゃないのか貴様あ!？」

魔王軍幹部、激おこである。

「・・・我が名はめぐみん、『アークウィザード』にして、爆裂魔法を操る者・・・」

「・・・めぐみんってなんだ、バカにしてるのか？」

「ち、違わい！・・・われは紅魔族の者にして、この街随一の魔法使い、私が爆裂魔法を撃ちこんでいたのは、あなたをおびき寄せさせるための作戦！まんまとこの街に来たのが運の尽きです！」

（・・・おい、あいつ何言ってるんだ？俺には爆裂魔法が撃ちたいって三日月に駄々こねてたようにしかみえなかったが・・・）

（うむ、しかもさらっと『この街随一』とか言っているしな）

（今日はまだ爆裂魔法撃ってないんでしょ？それに今日は冒険者もたくさんいるし強気なのよ）

仲間からこの言われようである。酷い。

「ほう、紅魔族の者か。なるほど、その名前は俺をバカにしているんじゃないなかったのか」

「おい、親からもらった私の名前には文句があるなら聞こうじゃないか」
紅魔族といえば魔王軍も警戒するほどの相手であるが、ベルディアはそんなこと気にしていない様子だった。

「・・・フン、まあいい。もともとお前らに用はない。城に爆裂魔法を撃ちこんでくるのをやめてもらえればそれでいい。」

「それは私に死ねと？紅魔族は爆裂魔法を撃たないと死んでしまうのですが」

「オイそんなこと聞いたことないぞ、適当な嘘をつくんじゃない！・・・どうしてもやめるつもりはないんだな、雑魚を蹂躪するのは趣味じゃないが、迷惑行為をやめないとすれば実力行使しかあるまい」

「迷惑なのはこっちの方です！あなたのおかげでこっちは仕事もろくに受けられないんですよ！・・・余裕ぶってるのも今のうちです、先生！お願いします！」

まさかのアクアに丸投げ。先生呼ばわりされて機嫌のよくなったアクアは、まんざらでもなさそうにベルディアの前に出た。

「しよーがないわねー！魔王軍幹部だかなんだか知らないけど、こんな昼間にのこのこ出てくるなんて「浄化してください」って言うてるようなもんよ！もとはといえどいづつのせいで私の貯金は大変なことになってるんだし、覚悟なさい！」

あなたが素寒貧なのはあなたがつくった借金のせいです。

「ほう、『アークプリースト』か？ 仮にも魔王軍の幹部がこんなところにいる低レベルの『アークプリースト』に浄化させられるとも思っているのか？ …… そうだな、少し遊んでやろう」

余裕綽々な様子ベルディアは、めぐみんに指を向けると

『汝に死の宣告を！ お前は1週間後に死ぬだろう！』

ベルディアが放った呪いは、まっすぐめぐみんに向かい――

「――つくー！」

――めぐみんをかばった三日月に当たった。

「おい三日月！ 大丈夫か!？」

「……うん。おれは平気」

慌ててカズマたちが三日月に駆け寄るが、三日月はいたって平気そうに還すのだった。

「その呪いは今は問題ない。狙いとは違ったがまあいい。……紅魔族の娘よ、その男は1週間後に死ぬ。貴様の行いのせいで、お前の仲間はこれから死の恐怖におびえることとなるのだ！ クハハハハッ！ 素直に俺の言うことを聞いていればよかったものを――」

仰々しくしゃべるベルディアだったが、その続きは言わなかった。

否、言えなかった。

なぜなら――

「――フンッ！」

「敵の事情？ 何それ美味しいの」マン

三日月が、鉄血メイイス得物を自分に向かって振りかぶってきたから

だ。

とつさに反応したベルディアだったが、回避が間に合わず、胸の鎧に小さくない傷がついた。

「き、貴様怖くないのか！ 仲間のせいで死ぬんだぞ!？」

「別にめぐみんのせいだなんて思っただけだし、それに――」

普段彼が浮かべないような、獣のような笑みを浮かべながら、

「――アンタをやっちまえばいいんでしょ!？」

三日月はベルディアに襲い掛かった。その勢いに気圧されたたのか、動きが鈍るベルディア。渾身のフルスイングから放たれた一撃は

「——っく！」

彼の手から剣をはじき落とした。

「・・・面白い！紅魔族の娘よ！この男の呪いを解きたくば、我が城に出向き、俺のもとまでたどり着いて見せろ！言っておくが城内にはわが配下のアンデッドナイトがひしめいている。クククッ、ひよっこのお前らに、果たしてたどり着けるかな？」

「そしてその男よ！貴様の呪いが解けたその時、お前と1対1で戦ってやろう！このベルディアの首、ホスっほい獲れるものなら獲ってみろ！」
尊大なことを言うと、ベルディアはマントをホスっほい翻し動作で帰っていった。

皆が呆然とする中、めぐみんは一人歩き出した。

「おいめぐみん、なにするつもりだ」

「・・・決まってるでしょう。あのデユラハンに爆裂魔法を撃ちこんできます。ミカツキの呪いを解かなくては・・・！」

カズマに肩をつかまされると、強い意志のこもった瞳で、めぐみんは答えた。

「・・・つたく、しょうがねえなあ、お前1人じゃ爆裂魔法を撃ちこんだ後に動けなくなつてアンデッドに囲まれるのがオチだ。帰りにおぶつてくれる奴も必要だろ？」

「それを言うならカズマもだよ。もともと気づけなかつたおれも悪いんだし、撃つまでの時間を稼ぐためにも前衛は必要でしょ？」

めぐみんの思いにこたえるように、男二人が腰を上げる。仲間を思う絆が、確かにそこにあった。

「目標は三日月の呪いを解除することだ、あいつと直接戦う必要はない。幸い1週間もあるし、1階1階爆裂魔法で敵を削っていけば何とかなるだろ」

カズマの提案に、2人がうなずく。絶対に仲間を助ける、そんな思いが彼らの中で確かに燃え上がっていた——
『セイクリッド・ブレイクスペル！』

——のだが、アクアの杖から放たれた奇妙な擬音が付きそうな光が三日月を包む。

「私にかかれば、デユラハンの呪いなんて楽勝よ！どう？たまにはプ

リストアップいでしょう？」

——『緊急クエスト：魔王軍幹部ベルディアの撃退』、クリア？

ソードマスターミツルギ

—前回のあらすじ—

めぐみんの爆裂散歩に騒音被害の苦情を叩きつけに来た魔王軍幹部ベルディア、三日月に呪いをかけ城に帰ったのだが、その後すぐにアクアによって解呪されたのだった

「クエストよ！この際キツイのでもいいからクエスト受けましょう！」

「……えー」

ベルディアの来襲から特に何もなく1週間がたとうとしていた朝、アクアが突然そんなことを言い出した。何でももうバイトは嫌だとのこと。

……こいつ本当に女神か？

結局仲間を放っておけないダクネスと恥も外聞もなく泣きじゃくるアクアに押され、クエストを受けることになった。

—こ、の、す、ば？—

「——私、売られていくモンスターみたいなんですけど……」

『汚染された湖の浄化』というクエストを受けることにした一行、アクア曰く、湖の浄化なんて水の女神である私にかかれば楽勝よ楽勝！らしいが、汚染された湖にいついて『ブルータルアリゲーター』というモンスターが浄化の邪魔をしてくるらしい、アクアの安全を確保した上で効率よく浄化を行うためにカズマが考え付いたのが、

「私、出汗をとられてるティーバッグの気分なんですけど……」

——『頑丈な檻にアクアを突っ込んでそのまま湖に沈める』というエリオン公もびっくりな作戦である。

大気圏外からダインスレイヴ

……こいつ本当に主人公か？

——このしゅばあああ！——

「……なあアクア、もう街なんだしそろそろ出てこいよ」

「嫌よ、この檻のなかこそが私の聖域よ」

虚ろな目でアクアが応える。浄化作業は途中まではうまくいったのだが、すぐに件のワニに囲まれてしまったのだ。

傷こそつかなかったものの、噛みつかれる距離までワニに近づかれるという某サファリパークも真つ青な経験は、アクアに新たなトラウマを刻んだらしい。

ドナドナ歌いながら闇しか感じない笑みを浮かべるアクアの尊い犠牲の下、珍しく無事にクエストが終わったなー、とフラグじみたことを思ったのがいけなかったのだろうか、

「め、女神様!? 女神様じゃないですかー! どうしてこんなところに!？」

いかにも「僕勇者です」と言ってるような格好をした無駄に爽やかな顔をした青年がアクアを見て驚いたように駆け寄ってきた。

—ここのくすくすばあく♫—

正気に戻したアクアに訪ねると、どうやら覚えてない様子、

御剣 ミヨギ キヨウヤ 響夜という（中二病全開な）名前からして、カズマ同様日本から転生してきた人間らしい。・・・が、

「どういうつもりだ!? アクア様に加えて『アークウイザード』と『クルセイダー』までいながら、リーダーは『冒険者』の君で、あまつさえ寝泊まりは馬小屋だって!？」

全員別方向に問題児 こちらの事情も知らずにカズマにつかみかかる御剣、マクラギ どうやら彼はアクアから受け取った特典のお陰で、金銭面に不自由することなく今日まで生きてきたらしい。上から目線で検討違いな説教をする皆が冷ややかな目を向けていることに気づかず、御剣はめぐみんたちをアララギ含めた3人を勧誘し始めた。

「今までたいへんだっただろう? もう大丈夫だよ、僕と一緒に来れば馬小屋でなんて寝かせないし、装備品だっていいものを買ってあげよう。職業的にもバランスがいんじゃないかな」

清々しいほどの自己中心ぶり、あのダクネスが生理的嫌悪を覚えるのだからよほどである。

もちろんそんな痛いヤツの誘いに乗るはずもなく、「間に合ってるんで結構です」と断ってその場を離れようとしたのだが、

「悪いがアクア様をこんな境遇の中に放ってはおけない」

もはやここまできるとストーリーカーかなにかである。

最終的に、『この世界に持ってきたモノ』として「魔剣グラム物」と

「女神（笑）アクア」を互いにかけて戦うことで同意した——答
だった。

「カズマ、おれにやらせてくれないかな」

——三日月が誘いを持ちかけてくるまでは。

——このすば——

「——いいのか三日月？」

「……いいってなにが？」

「いや、アイツ多分相当強いぞ、下手したらただじゃすまない
じゃ……」

三日月にしては珍しい自己主張で、（オレが）戦わずに済むのならそれ
でいいんだが、やはり不安に思っているらしい。

このゲームバランスの狂ったふざけた世界で始めて出会った頼れ
る仲間、正直コイツがいなければとうの昔に全滅していたんじゃない
かと思う。そういう意味では、コイツの存在はオレの中でかなり大き
なものになっていたらしい。

「——寝覚めが悪いから死ぬんじゃないぞ」

「……長生きするつもりだから大丈夫」

一体いつぶりだろうな、誰かの応援なんて。

「……準備はいいかい？」

「……」

「悪いけど手を抜くつもりはないよ、アクア様のためにも、あの男には
手を引いてもらうしかないからね。それにしても、自分で戦う度胸も
ないのか彼は、よくそれで魔王を倒すなんて——」

「——さつきからいちいちうるさいなあ」

「——!？」

その目を見た瞬間、御剣は自分の心臓を鷲掴みにされたかと思っ
た。

どこまでも冷たい、相手のことをなんとも思っていないような瞳。そ
れはまるで自分のすべてを見透かしているような——

「——そもそも最初からカズマにそんなこと求めてない」

「戦うことしか出来ないおれと違って、カズマには自分で考えて動け

る頭がある。おれたちのためにも頑張ってくれている」

「なにも知らないオマエが、カズマをおれの仲間をバカにするな——」

「ふ、ふん！そんなこと僕に勝ってからいってみろ！」

目の前の敵を倒すために、御剣が魔剣の人が一步踏み込んだその瞬間、

「——ふうんっ！」

——三日月はメイスを投げつけた。

僅かな隙をついた攻撃に慌てながらも対応した御剣、咄嗟に剣で弾いたのは見事だったが——

「——!!!」

「グハアッ!?!」

相手が悪かった、絶望的に。

メイスを弾くために剣を切り上げたその刹那、相手の懐に飛び込んで渾身の拳を放った三日月。

的確に狙った一撃で脳震盪を起こした御剣、崩れ落ちる直前、最後に彼が見たものは——

冷たい瞳を向ける、白い悪魔の幻覚だった。

激闘、ベルデイア（前編）

—全開のあらすじ—

魔劍の勇者様
噛ませ犬をフルボッコにした。

それは、御ミミミ劍ミミミから魔劍と彼がひん曲げた檻の弁償代をふんだくった次の日のことだった。

『緊急！緊急！冒険者の皆様は、直ちに武装して正門前に集まってください！』

カズマがここに来てから3回目の緊急連絡。またキャベツでも来たのか？とだらけながら聞いていると、

『—特に、『冒険者』サトウカズマさん、ミカヅキオーガスさんとその一行は、大至急でお願いします！』

・・・待つて、今誰を呼んだ？

—このすば—

カズマ
俺たちは慌てて正門へ向かった。おれ、アクア、めぐみの3人はもともと軽装だったので支度に時間はかからなかったが、重装備のダクネスと、用事だから別行動していた三日月はまだ来ていなかった。

「何だ、またアイツか」

既に集まっていた冒険者たちの視線の先にいたのは、先週のデユラハンだった。

しかも今回は奴1人だけじゃない。朽ちた鎧を身に纏ったアンデッドを大勢連れていた。

俺達—俺とめぐみを見つけたデユラハンが、開口一番叫びをあげた。

「何故・・・、何故城に来ないのだこの人でなしがあああ!!」

なにやらすごい怒っているが、まるで見当がつかない。

「な、何でそんなに怒ってんだよ。もう爆裂魔法は打ち込んでないし、そもそもお前の城に行く理由がない。後、人でなしなんて魔王軍に言われる筋合いはないぞ？」

『爆裂魔法は打ち込んでない』だと!?何を白々しいことを言っている! その頭のおかしい紅魔族の娘があれからも毎日欠かさず打ち込みに来るわ!』

「待って、ちよつと待って」

横のめぐみんに目を向ける。あつ、目を逸らされた。

「・・・お前、行ったのか? もう行くなって言ったのに行ったのか!」
「いひやいいひやいいひや! 違うのです! 聞いてくださいカズマ! 今までならばその辺の荒野に放てば満足できたのですが、城への爆裂が忘れなくて・・・!」

もじもじしながら誤解されそうなことを言ってるじゃねえ!

「大体、お前帰りはどうしてたんだよ! まさか共犯が・・・!」

アクアが目を逸らす。

「お前かあああ!」

「だってだってえ! アイツのせいでもろくなクエスト受けれないんだもん! 腹いせがしたかったただけだもん!」

ちつたあ反省しろやこの駄女神があ!

「・・・まあ爆裂魔法の件は置いておこう。何より俺が頭に来ているのはな、貴様らが自分の仲間を平然と見捨てたことだ! こうしてデュラハンになる前は、これでも全うな騎士であつたつもりだ。その俺から言わせれば、仲間を庇って呪いを受けたあの男は、素晴らしい騎士の器だつたというのに——」

「あれ、この前の奴じゃん」

「」

そこに、ようやくやって来た三日月とダクネスと目があつたデュラハンがすつとんきような声をあげた。

「あ、あれえー!」

「いや効いてるだろ、ギャーって叫んでたし」

よろめきながらも立ち上がるベルディア。

「は、話は最後まで聞くものだ……。この魔王軍幹部のベルディア、魔王様のご加護と俺自身の力が合わされば、そこいらのプリーストの浄化魔法など恐れるに足らん！……の、だが、お前本当に駆け出しか？」

抱えている首を傾^{傾げる}けるベルディア。

「……占い師がこの街に光が落ちてきたと騒ぐから調べにきたのだが……。いつそのことこの街ごと消すか……？」

ふん！わざわざ俺が手を出すまでもない、お前ら！この街の奴等に地獄を見せてやれ！」

「アイツアクアの魔法にビビりやがったな！自分だけ安全なところにて部下使って襲わせるつもりだ！」

「ちちち違うわあつ！最初からそのつもりだったわ！魔王軍幹部がそんなヘタレな筈も腰が軽い筈もなからう！こういうのは雑魚を蹴散らしてから大物に挑むのが定石——」

『『ターンアンデッド』——』

「ひゃわあああ——！！」

再びアクアが浄化魔法を放つ。先ほどと同様、その場で転がり回るものの、浄化には至らなかった。

「く……。話は最後まで聞けと言っただろう！お前ら！この街の連中を皆殺しにしろ！」

——このすばっ——

そこは、まさに死屍累々と言うのが相応しかった。半分くらいアンデッドだし。

「誰かプリースト読んでこい！早く!？」 「誰でもいいから教会から聖水もらってこい！ありったけだ！」 「相手がなんだろうと関係ない。敵だっていうんなら叩き潰すだけだ……！」

歩を休めることなくこちらに向かつてくるアンデッドナイトに、その場の冒険者達が慌て始める。

「フハハハハ！この街をカオスに陥れてや、る……？」

それを嘲笑うベルディアの笑い声が響く中――

「いやーっ！なんでこっち来るのよおお！私女神なのに！日頃の行い良い筈なのにーっ！」

「ず、ずるい！どうしてアクアのところばかりにアンデッドが……！私だつて日頃の行いは良い筈なのに……っ！」

「……むしろ普段の行いの差でしょ、これ」

アンデッドは真っ直ぐアクアに向かってきた。どうやら無意識のうち女神（C）であるアクアに救いを求めて寄ってきているらしい。

「ま、まあ一ヶ所に集まってるなら好都合だ！めぐみん！アイツら全員爆裂魔法で吹き飛ばせるか!？」

「え、ええ。可能ですが、ああも街の近くにいられると……」

「その辺はオレが何とかする！お前は街の外でいつでも撃てるように待機してろ！」

「わ、わかりました！」

「カズマさあーん！たじゆけてええー！」

こちらに駆け寄ってくるアクアを街の外へ連れていく。それにつられてアンデッド達も外へ向かう。

「今だめぐみん！やれえー！」

「……こ、この絶好のシチュエーション！感謝しますカズマ！我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法を操る者！我が力が見るがいい！」

「――『エクスプロージョン』ッ!!」

閃光が爆ぜる。めぐみんの渾身の一撃は、地面ごとアンデッドを焼き払った。

「おんぶ、いるか？」

「あい。お願いします」

「やるじゃねーかあの頭のおかしい娘！」「名前と頭がおかしいだけでやるときはやるじゃねーか！」「やっぱすごいよねアレ……」

「……すいません、ミカツキ以外のその人たち爆裂したいんで連れてってください」

「もう魔力残ってないだろ、今日はゆっくり休んどけ」

「ごくろうさん、とめぐみんを労るカズマ。その光景を眺めながら方を震わすベルディア。」

「・・・クハ、クハハハハ！面白い！まさか駆け出しどもにここまで良いようにやられるとは！良いだろう！約束通り相手をしてやる——」

「——お前の相手は——」

「私たちだっ！」

殺る気満々のベルディアと向かい合う三日月とダクネス。

アクセルの命運を左右する戦いは、最終局面に突入しようとしていた・・・。

激闘、ベルディア（後編）：決着！！

— 前回のあらすじ —

激おこで再びアクセルに現れたベルディア。配下のアンデッドナイトをめぐみんの爆裂魔法で焼き払い、残る敵はベルディアただ一人。

勝利の女神はどちらに微笑む——否、どちらに跪くのか？

あ、アホの女神アクア様は座ってください。

「この数で全方向から攻撃すりや例え魔王軍の幹部でも対処出来ないだろ！お前ら、一気にやっちまえ！」

他の冒険者の掛け声で、その場にいた冒険者達が一斉にベルディアに襲いかかる。

確かに、相手の死角を突くのは戦いにおいて最も有効な戦術の一つだ。如何なる強者と言えど、後ろに目があるか、首が180度回らない以上後ろからの攻撃には数瞬遅れる。

—— 相手が普通の人間であれば、だが。

おもむろに抱えていた首を上空へ放り投げるベルディア。

嫌な予感と、何かに気づいたカズマ達は襲いかかった冒険者に静止の声を掛けようとしたが、それよりもほんの僅かに速く、冒険者達の刃がベルディアに襲いかかる—— 筈だった。

—— まるで後ろに目があるかのように、ベルディアが攻撃をかわしたのだ。

「—— はっ。」

返す刃で襲いかかった冒険者全員を切り伏せるベルディア。

その何が起きたかわからないと言っているような最期の言葉は、一体誰の口からこぼれたものだったのか。

誰もが絶望し、膝を折りかけた。ベルディアの目の前に立ち塞がる2人を除いて。

「次は私が相手だ、デユラハン！」

金髪の長い髪を靡かせ、ダクネスがベルディアに相対する。

「やめろダクネス！攻撃を当てられないお前が勝てるわけないだろ！？」

掠りもしない剣を振り、ベルディアの攻撃を一身に受けるダクネス。ダクネス本人がいくら堅くても、一方的に攻撃を受け続けられるのは時間の問題だ。

当然止めようとするカズマ。しかしダクネスは強い意思でそれを突っぱねるのだった。

「——私は聖騎士だっ！」

「例え何十回攻撃が外れても、攻撃が当たるまで何百回でも攻撃するだけだ！」

普段の行動がどんなに変態的でも、彼女の芯にあるのは正に騎士の誇りと呼ぶにふさわしいものだった。

それに、この場で立ち向かっているのは、ダクネスだけではない。

「——ふうんっ！」

「ぬうっ!？」

三日月の不意打ちをかわしきれず攻撃がかすってしまったベルディア。

「あんたはおれが潰す」

「・・・面白い！やってみろ！」

2人に呼応するように1人、また1人と冒険者達が立ち上がる。

魔法で2人をを援護しようとする者。窃盗スキルでベルディアから武器を奪おうとする者、襲いかかる恐怖を振り払おうと必死で立ち向かう冒険者達。

「この場にいるお前ら全員、1週間後に死にさせえええ！」
既に死んでいる者ベルディアはそれを嘲笑うように死の宣告を唱える。

動揺し攻撃を躊躇う冒険者達、ベルディアの攻撃に耐えられず、自分達の得物が砕けたダクネスと三日月、

少しずつ、しかし確実に詰まされているこの状況、それを一転させたのは、カズマが放った『クリエイト・ウォーター』をベルディアかわした理由にカズマが気づいたときだった。

考えろ考えろ考えろ！この状況を打開する方法を考えろ！

オレの取り柄なんて相手の嫌がる方法を見抜くくらいだろ！思考を止めるな、考え続けろ！

なんでアイツはオレの水を大袈裟にかわした？

——奴が避けなければならなかった理由、——流れる水、——アンデッドの弱点——！

『クリエイト・ウォーター』！お前ら水だ！こいつの弱点は水だあああ——！』

『クリエイト・ウォーター』！『クリエイト・ウォーター』！『クリエイト・ウォーター』！

カズマを筆頭に水魔法を唱える魔法使いたち。しかしベルディアには当たらない。

「ねえねえカズマ、何、皆して魔王軍の幹部と水遊びでもしてるの？」

この駄女神、今までどこで油を売ってた？

「水だよ水！アイツの弱点！お前確か仮にも曲がりなりにも一応はかろうじて多分水の女神だろ！なんちやって女神じゃなけりや水の1つでも出してみろ！」

「仮でも何でもなく水の女神よ私は！分かったわよ！出せば良いんでしょ出せば?!」

売り言葉に買い言葉。カズマの言い様にキレたアクアが水を出そうとする。

「この世に在る我が眷族よ、水の女神アクアが命ず・・・」

爆裂魔法を放つめぐみんと似た威圧感を放つアクア。

危険を察知しベルディアが逃げようとするも、ダクネスと三日月にしがみつかれ動けない。

『セイクリッド・クリエイト・ウォーター』！

アクアが放った洪水と言わんばかりの水は、ベルディアを、カズマを、そして周りの冒険者を達巻き込んだ。

「ぎゃ——!!」「ちよ!?!ちよつとま——」「ゴボボボボ・・・」「め、めぐみ——ん!?!」

やがて水が引き、残されたのは倒れ込む冒険者と、

「馬鹿なのか？馬鹿なのか貴様・・・!？」

よろめきながら立ち上がるベルディア、そして

「——!」
獲物に飛びかかる狼のように真っ直ぐベルディアに飛び込む三日月だった。

——
やっぱりカズマは凄いや、こんな作戦■■■■にだってできやしない。

背負っていた武器を抜き、目の前の敵目掛けて振り下ろす。

「小僧、まさかそれは・・・!？」

この前こいつが落としていった剣を加工して作った武器ソートメイス、時間と金がかかったけど、これならコイツヲコロシキレル・・・!

「・・・ぐう!? 貴様とでもうボロボロのはず・・・、どこにこんな力が・・・!」

ボロボロ？まだ動ける、まだおれはおれは生きている、まだおれは戦える・・・!

「魔王軍の幹部とかどうだって良い。あんたがおれたちを殺そうとするなら、おれの全部でそれを止める——」

おれには戦うことしかできない。カズマみたいにとんでもないことを考え付けないし、■■■■■みたいに声だけで戦いを止めることも出来ない、■■■■■みたいに誰かを導くことも出来ない。オレにできることなんて——

「おれとおれの仲間のために、今できることを全力でやるだけだ——」

「だから——」
「とりあえず今はあんたが邪魔だ——!」

叩く、かわす、叩く、かわす、叩くかわす叩くかわす叩くかわす——

一体何度打ち合っただろうか、

「はああああー!!」

「ああああー!!」

手を出そうとする者は誰もがおらず、皆固唾を飲んで三日月の戦いを見守る。

彼を応援する者がいた。彼に畏れを抱く者がいた。彼を恐れを抱く者がいた。

やがて、戦いの音が止む。最後に生き残り、勝鬨とともに手を掲げたのは――

「フハハハハ、見事だ小僧！よくぞこのベルディアを討ち取った！」

「・・・何でそんな嬉しそうなのさ」

「1度地獄に墜ちたこの身体、まさかお前のようなやつと戦って朽ちることができるとはな！だが忘れるな、幹部はまだ7人いる。やつらを倒さねば魔王城への道は開けない。地獄でまた逢おう。フハハハハ――」

ベルディアの身体が糸の切れた人形のように倒れる。

緊急クエスト：魔王軍幹部ベルディアの討伐。クリア――

あとの事を話すと、あのおときアクアは倒れた冒険者達に蘇生魔法をかけていたらしい。

ダクネスが真っ赤になってたけど、どうかしたんだろうか。

あのアンデッドの討伐報酬だけど、どうしてかほとんどをおれが貰うことになった。アクアを除いて誰も文句を言わなかったのが不思議だったけど、そんなことを考える前に金の使い道が決まった、決まってしまった。

「ま、街の損害の弁償金額3億4千万エリス・・・!?」

アクアが出したあの水、どうやら街に入ったときにかかなりの被害を出したらしい。

うちひしがれるカズマ、逃げ出すめぐみん、カズマに捕まるアクア、その肩に手を置くダクネス。

報酬のほぼ全部を持っていかれたけど、そんなに辛くはなかった。

——ねえ、オルガ。見つけたよ、おれの新しい居場所。

だからおれはここで皆と一緒に生きていく。この理不尽で素晴らしい世界で——

・・・とりあえず、このままだとカズマがアクアを絞め殺しかねないから止めに入ろう。

「この素晴らしい世界で本当の居場所を！」

第1章： Iron Blooded Brutals —完—

機動要塞デストロイヤー血も涙もない外道ズ
最近寒くなりました

——ここは、ベルゼルグと呼ばれる王国の、アクセルという小さな街。

付近のモンスターのレベルも低く、初心者の冒険者達が多く集まることで有名な街。

そこにある冒険者ギルドでは、今日も平和な騒ぎ声が——

「お前が作った借金のせいで金がないんだよ！こんなんで冬なんて越せるわけないだろうがあああー！——」

「だってだってしようがないじゃないのぉー！——」

——いやあ、今日も平和だなあ！

——こ、の、すばっ！——

「朝から騒がしいな、皆見て……いないな。もう皆なれたのか」

アクアが作った借金のことで揉めていると、ダクネスとめぐみんがやって来た。

「二人とも早いですね。……そういえばミカツキが見あたりませんが」

「三日月なら今日は来ないぞ、さっきクリスに連れていかれた」

ダンジョンの攻略に手を借りたいとか……何でそんな不機嫌そうなのめぐみんさん？

「……何でもありませんっ！」

……いやいや、まっさかあ……

——こっ！のすばあ！——

「……敵感知に反応なし、行くよ」

「了解」

クリスに教えられたスキルを使いながら、敵との接触を避けつつダンジョンの奥を目指す。やっぱり便利だね、盗賊スキル。

「……見えてきた、最奥部だよ」

「じゃあここからはおれの仕事だね」

「頼りにしてるよ、ミカツキ！」

ダンジョンの一番奥、そこにいる敵に向かって突撃する。

「よく来たな人間！しかし残念、貴様らの生はこの私の手によって「うるさいよ」げぶふうっ!き、貴様人の話を最後まで——」

こつちが攻撃してるのにまだ何か言おうとしてるけど、気にせず全力で得物ソートメイスを振り下ろす。

「な、なんと卑劣な！誇り高き私の話の腰を折るなど——！」

「——いや、アンタ敵でしょ?」

態々敵の話を聞く必要なんてあるの?この前のやつベルディアといい、あのおっさんみたいなのが多くない?

「文句があるなら勝ってからにしろよ」

「舐めるな人間風情があ!」

——このすば——

「こ、こんな卑劣なやつにやられるとは……!」

クリスの援護もあつたので、終止こちらの有利で終わった。

正直おれ必要だった?

「いや、ミカツキの強さつてはつきり言つて異常だからね?」

そもそも『冒険者』が魔王軍の幹部とか倒せるわけないでしょ、とクリス。おれはいつも通りに戦ってるだけなんだけど……。

「それで、目当ての物は?」

「あーちよつと待つて、今探して……あつた!」

そう言いながらクリスが見つけたのは、小さな指輪。見たところ価値があるようには見えないけど……。

「……なんかその指輪、前に何処かで似たような感じのを……」
雰囲気と言えいいのか、具体的にはこの前アクアに絡んできたやつの剣みみたいな。

それを言うとかリスは

「いやーミカツキの気のせいじゃないかな!うん、気のせい気のせい!あーあたし用事あるからこれで帰るね、今日はありがとう!」

あ、行っちゃった……。なんか急に慌てて誤魔化してたけど……。

「……エリスに似てることとなんか関係あるのかな」

『その冒険者クン！盗賊スキルに興味ないかな？』

『・・・エリス？何でここにいんの？』

『　　な、ななな何言ってるのかにやーっ!?あたしの名前はクリス！確かに女神エリス様に名前は似てるしあたし自身エリス教徒だけど、さすがにそれはエリス様に失礼なんじゃないのかなっ！』

『紹介するね！あたしの友達のもの——』

『ダクネスだ。よろしく頼む』

『・・・よろしく』

『どう？便利でしょ、盗賊スキル』

『・・・うん。ありがとね』

『お？もつと素直になっても良いんだぞーこのこのー』

『・・・クリス、鬱陶しい』

『ただいまー・・・ってどうしたの？』

ギルドに帰ると、カズマたち（主にアクアが）騒いでいた。

「あー、あんな清楚な女神様がいるってのに家のは駄女神とか世の中不公平だよなーって」

「ちよつとカズマ！今の言葉訂正しなさい！どうして私がハズレみたいな言い方なのよー！」

「へー、エリスと会ったんだ」

「まじまじ、あんな性格も容姿も別嬪さんなんて前世でもそうそう見ないって・・・おいちよつと待て、お前今なんて言った」

「じゃ、おれ帰るね。また明日」

「おいちよつと待て三日月、待てってばー！」

結局普通が一番いい

―前回のあらすじ―

クリスとクエストに行ったりカズマがエリスに会ったり

それは、三日月がクリスとクエストに行つた日から数日後のこと
だった

「おい、もういっぺん言ってみろ」

「何度だつて言つてやるよお！上級職におんぶに抱つことはいい御身分だな最弱職さんよお！」

突然絡んできたこの男、ダストというらしい。

酔っぱらいの妄言と一蹴してもよかつたが、彼の言うことにも一理あると思つて話を聞いたのが間違ひだった。

「いい女3人に囲まれていい気分してるつて言つたか今!?お前何処にそんな女がいるんだよ！人の苦勞も知らないでなめたこと言つてんじやねえぞクソがあ！」

おんぶに抱つことかふざけたこと言つてんじやねえぞコラア！

―このすばあ！―

と、いうわけで

「オレカズマ！よろしくな！」

「お、おう」

憎きあん^ダにやろう^トと1日だけパーティを入れ換わることとなり、彼の仲間であるクルセイダーのテイラー、ウィザードのリーン、アーチャーのキースとそれぞれ自己紹介をしたのだが、

「・・・カズマ？アクアたちはどうしたの？」

「・・・それはこっちの台詞だ三日月」

聞くところの人たち、以前からの知り合いらしい。

「じゃあこいつがミカツキが組んでるつていう奴か？」

「うん。すごいよカズマは、おれが思い付かないようなことどんどん考えるんだ」

「・・・あたしが何度声をかけても組んでくれなかつたのになー・・・」

急に不機嫌になるリーン、・・・まさかこいつもか？

「・・・どうしたのかズマ？」

「いや、お前苦労しそうだなーって」

「？」

—このすば—

「・・・で、ゴブリン退治だっけ？」

「ああ、今回はミカツキもいるしカズマは荷物持ちでもやっていく
れ」

え、なにもしないで報酬もらっていいのか？

「どうせ元のパーティーでも荷物持ちだったんだろ？一人くらい増えて
もどうってことないさ」

余所者のオレにも気さくに話しかけてくれるテイラー。

先程から仲間に出している的確な指示といい、まさにリーダーと
いった感じだ。

・・・これだよ、このいかにも冒険してますって感じの雰囲気、こ
んなやり取りをしたかったんだよ。

帰って酒飲みたいだの爆裂したいだの敵地の真ん中に行きたいだ
の、やっぱりこういうノリが普通なんだよな、普通最高。

「（・・・カズマがすんごい幸せそうな顔してる・・・）」

「・・・お？敵感知に反応？けど一匹だけだな」

しばらく山道を歩いていると、敵感知スキルがなにかをとらえた。

「カズマ、お前そんなスキル持ってたのか？・・・一匹だとするとゴブ
リンじゃないな、一本道じゃすぐ見つかつちまうし迎え撃つか・・・
？」

「それならカズマが潜伏スキル持ってるよ、そこの茂みに隠れてやり
過ごした方がいいんじゃないかな」

流星は場数を踏んだパーティー、全員が無駄な戦闘は避けて様子を見
ることに賛成した。

・・・普段なら絶対こういう風に行かないもんな。

しばらく隠れていると、そいつは現れた。

虎やライオンよりも大きな体、サーベルタイガーのように鋭く伸び

た牙、見るからにヤバそうなやつだ。

さつきまでオレたちがいたところを注意深く観察するも、やがてオレたちが通ってきた道を歩いていった。

「……あつぶねえ！初心者殺しじゃねえか！」

「やっぱヤバイのか、アイツ？」

「賢くて頭が回るんだって、雑魚モンスターの住処の近くで冒険者たちを襲ったりとか、パーティーを分断して戦力を削ぐとか」

「なにそれこわい」

何、モンスターも知恵を使うの？爪を煎じてアクアに飲ませれば効果ある？

「……とりあえずゴブリン討伐を優先しよう。どちらにせよここに隠れてもらちがあかない」

テイラーの案に皆が賛成する。するとリーンがオレに預けていた荷物をとって

「た、頼りにしてるからね……？」

テイラーとキースも慌てて荷物をとる。

「べ、別にカズマを頼りきってるわけじゃないんだからな！」

男のツンデレとか誰得？

——こゝのすばあくー

「じゃあ三日月は一度初心者殺しと戦ったことがあるんだ？」

「って言っても目を潰してすぐに逃げただけどね」

歩きながら話をしてしていると話題は三日月とテイラーたちの馴れ初めに変わっていた。

「あそこで三日月が助けてくれたから今もこうして冒険できるんだよね、ありがと？」

「……リーン、苦しい」

「（……え、やっぱりあの二人ってそういうこと？）」

「（ああ、あれからずっとミカツキが絡むとこんな感じだ）」

「（『最近ミカツキがががまってくれな—い—』ってうるさかったから今回ミカツキに同行を頼んだわけだしな）」

「（……うちのパーティーにも怪しいやつが一人いるんだが）」

「(この前銀髪の娘と仲良さそうにしてたのを見たぞ)」

「(・・・苦勞しそうだな、アイツ)」

「(同感)」

「・・・つと、そろそろだな。カズマ、敵感知に反応は？」

「・・・おう、うじゃうじゃいるぞ」

「初心者殺しが引き返してくる気配もないし、やるなら今のうちだね」
前方の目的地をオレが、後方から挟み撃ちにしてくるかもしれない
初心者殺しの警戒を三日月が敵感知で行う。

「たくさん群れてるっていうならゴブリンだな、早いとこ片付けて帰
るぞー！」

意気揚々と駆け出していくテイラーとキース。

「・・・なあ、探知したやつらだけでも数えきれないくらいいたんだが」
「・・・ゴブリンの群れてそんなにたくさんいたっけ？」

青ざめながら首を横に振るリーン、慌ててオレたちもあとに続く。

「多っ!?!」

そこにいたのは、ゆうに30を超える数のゴブリンだった。

「このすばー!」

「くっそこいつら弓持ってやがる!リーン、支援頼む!」

慌ててリーンが詠唱をするが間に合わない。放たれた矢はまっす
ぐテイラーとキースに向かい――

『ウインドブレス』ッ!」

――間一髪でカズマの初級魔法が間に合い、飛んでくる矢を吹き飛
ばした

「出来たよ!『ウインドカーテン』!」

次いでリーンの支援魔法が発動しカズマたちの回りを風が吹き荒
ぶ。

『クリエイト・ウォーター』!からの『フリーズ』!」

畳み掛けるように窪地になっている足場を凍らせてゴブリンの動
きを封じるカズマ。

「三日月!テイラー!上ってきたやつらはオレたちで叩くぞ!二人は

残ったやつらと援護を頼む！」

「やっぱりカズマはすごい・・・っね！」

「で、でかしたカズマ！これならどれだけいようと関係ねえぞ！」

「うひゃひゃなんだこれ楽勝じゃねーか！」

「どんどん行くよー！」

クエスト：ゴブリンの群れの討伐、クリア！

不思議のダンジョン／風来のカズマ

―前回のあらすじ―

「……お前ら、苦勞してたんだな……」

「……涙ふけよ」

「明日はダンジョンに行きます」

「いやです」

「行きますー!」

「いやーでーすー!」

冒険者ギルドは今日も賑やか。どうやらカズマとめぐみんが言い争っているようです。

「ダンジョンとか爆裂魔法使えないじゃないですか! どうせならゴレムとか出てくるようなクエストに行きましょうよ、……あの重厚感、洗練されたフォルム、豪快な外見とは裏腹に緻密に設計された内部機構、ああ、やっぱりロボットは最高です……!」

「めぐみん? 今のめぐみんってホントにめぐみん?」

―ナイト……このすば―

「最初に言っておくがダンジョンに入るのはオレと三日月の2人だけだ。2人

皆にはダンジョンに着くまでの護衛を頼みたい」

『『キールのダンジョン』か。あそこなら対したモンスターも現れないし、ミカヅキを連れでいけば方が一の事態にも対処できるか』

「そういうこった。ダンジョン経験者って点としても三日月は緊急時の保険って訳だ」

「そういうことなら大丈夫だよ。……それにしても『潜伏』に『畏感知』に『敵感知』って、ホントに便利だよ、盗賊スキル」

―キングクリムゾン! 道程を消し飛ばしダンジョンに潜ったという結果を得る!―

キールのダンジョンにたどり着き、(私も行くと駄々をこねた)アクアも連れてダンジョンに入ったカズマたちだったが、

「・・・なんか、やたらとアンデッドに絡まれた気がするな」

「潜伏スキルも効果がなかったし、アクアがいなかったらきつかったかもね」

初心者向けのダンジョンと聞いていたのに、中にいたのはプリーストなしでは全滅しかねない程の数のアンデッドだった。

罠を避け、アンデッドを浄化しながら奥へ進んで行くと、アクアがアンデッドの気配を感じ取った。

「・・・待って、この向こうにアンデッドの臭いがぶんぶんするわ」

一番奥、最後と思われる部屋にいたのは、

「おや、プリーストかい？」

アンデッドの王、リッチーとなったダンジョンの主、キールだった。

——このすば——

「—そして私はそのお姫様と愛の逃避行の後、このダンジョンに立て籠ったというわけさ」

ダンジョンの主であるキール本人から聞いた彼の身の上話は、街で耳にした噂とは全く異なるものだった。

「アークプリーストである君に頼みがある、私を成仏させてくれないか？」

愛する者の為に人の道を外れたキール。しかしその選択は彼に長きにわたる苦しみを強いたのだった。

不死者の運命、強い絆で結ばれた二人を隔てたのは、皮肉にも彼が乗り越えた『死』そのものだった。

全てを失い、暗闇の中で1人朽ちるのを待ち続けた。

——1人のアークプリーストが現れるまでは。

「人の理を捨てリッチーとなったアークウイザード、キール。水の女神アクアの名において貴方を許します」

アクアは、今まで見せたこともない慈愛に溢れた顔でキールに告げる。

「次に目が覚めた時、エリスという不自然に胸を盛った女神がいるでしょう。次の生でも彼女と共にいたいなら、その娘に祈りなさい。きつと力になってくれるでしょう」

キールの体が光の粒となって消えて行く。

「これでようやく彼女の元に行ける……。ありがとう、女神のような
プリースト……」

感謝の言葉を最後に残して、キールは愛する者の元へ旅立った。

婚礼の誓いに、『死が2人を別つまで』というフレーズがある。

けれど、あの2人なら、死んでも、転生して何もかも忘れてしまっ
たとしても、きつとどこかもう一度めぐりあうだろう。

何の根拠もないが、なぜだかカズマはそう確信していた。

ゴースト・パニック

—前回のあらすじ—

嘘よ！こんなシリアスこのすばじやないわ！

アクセルの街、その中のある店の前に、おれ達はいた。

「いいかアクア、暴れたり喧嘩したりするなよ、わかってんのか？」

「カズマってば私のことチンピラかなにかと勘違いしてない？女神よ、神様なのよ!?!」

ちなみにダクネスとめぐみんは不在だ。ギルドで待機しているダクネスはともかく、めぐみんはどこで何をしているのやら……。

言い争っている2人を無視して、扉を開けて中に入る。

「いらつしやいませ……ああ!?!」

「出たわねこのくそアンデッド！なんで私が馬小屋で寝泊まりしてるとっていうのにアンタはこんなところで店なんて構えて痛いっ!?!」

「……さつき暴れるなってカズマも言ってたでしょ……？久しぶり、ウイズ」

—このすば—

以前の墓地騒動で知り合った人間の中で生活しているリッチーのウイズ。もともと彼女からいつでも遊びに来てくさいとは言われていたが、今回ここに来たのはカズマの提案だった。

———他のスキルもいろいろほしいからな。……割と絶妙にギリギリのバランスで成り立つてるよな、このパーティ。

実際カズマの判断は正しいと思う。めぐみんもダクネスも今のスキル構成を変えようとしないだろうし、アクアに至ってはレベルを上げてもこれ以上ステータスが上がらないらしい。おれも魔法とかのスキルは覚えられないみたいだし、パーティの戦力を上げるにはカズマが色々できるようなのが一番確実で早い。リッチーであるウイズから教えてもらえるスキルがどんなものかはよくわからないけど、まあその辺は教えてもらってから考えよう。

……アクアのステータスが上限ギリギリなのに知能と幸運値がお

れより低かったのは黙っておいた方がいいんだろうか。

—このすばっ—

途中またアクアが迷惑をかけそうになったが、最近パーティ内のサブストッパーの地位を確率しつつある三日月が制止(物理)する。：：しかし爆薬しか置いてないのかこの店？

「そういうえばベルディアさんを倒されたそうですね。あの人は幹部の中では腕の立つ方でしたが、すごいですねえ」

．．．ん？

「ベルディア．．．って誰だっけ？」

「いや死闘を繰り広げた相手なんだし覚えとけよ．．．って、あいつと仲良さそうな口ぶりだな。アンデッド同士のつながりでもあったのか？」

「ああ、言ってますませんでしたっけ。私も魔王軍の幹部なんですよ」

へー、魔王軍の幹部かー。どうりで仲が良いわけだ．．．って

「確保ーっ！」

「待つてー！話を聞いてー！」

「どうするカズマ、ヤッチャウ？」

「本人もああいつてるし話を聞いてやろうぜ。．．．あとお前はそのすぐ物騒な方向に話を持っていく癖を治しなさい」

—このすばっ！—

「確かに私は魔王軍の幹部ですけど、単に魔王城の結界の維持のために頼まれただけなんです！」

賞金だっけかかってません！と潔白．．．潔白？を主張するウイズ。

「するとあれか、幹部を全員倒すと魔王城への道が開けるとかそういうあれか？」

「そうなんです！それに、アクアさんがいるなら2、3人の幹部で維持する結界なら壊せる筈です！だからどうか命だけは．．．っ！」

「．．．なんかこっちが悪者みたいで罪悪感湧いてきたんだが．．．。ここでウイズを浄化したところで何も変わらないみたいだし、別に人間を襲ってるわけじゃないんなら見逃してもよくないか？」

「．．．まあ、敵対するつもりがないのなら」

文句をたれるアクアを放置して、ウイズについては放っておくことにした。

「・・・それでスキルですね。え・・・っと、『ドレインタッチ』なんてどうでしょう」

「どういうスキルなんだ？名前からして何かをすいとるスキルみたいだが」

「はい。触れた相手から体力や魔力をすいとるスキルです。同じ要領で相手に自分や同時に触れてる他の人の魔力などを分け与えることもできますよ。・・・カズマさんは冒険者なので、スキルを見せる必要があるんですよ？どなたか相手になってもらえますか？」

「じゃあおれが。アクアがまた変なことしそうだし」

「ありがとうございます。失礼しますね・・・えいっ」

可愛らしい掛け声と共に、ふわふわとした光が三日月からウイズに流れていく。

冒険者カードを確認し、スキル欄に『ドレインタッチ』の文字があることを確かめる。スキルポイントも充分あるので迷わず習得した。

「・・・どうですか？」

「おう、バツチリだ。ありがとうな」

「いえいえ、これくらい・・・あ、あれ・・・？」

突然ウイズがふらつき始めてそのまま倒れる・・・っておい！

「大丈夫か!?まさか三日月が何かやらしたのか!？」

「確かに原因としてはそれが1番ありえるけどひどくない？」

「だ、大丈夫です・・・。どうやらミカツキさんの魔力に中つちやつたみたいですね」

「・・・?でも、ルナはおれには魔法が使えないっていったけど?」

「えっ」

「えっ」

「・・・どういうこっちゃ」

結局原因がわからず首を傾げる俺たち。

その時だった。

「ごめんください。ウイズさんはいらっしやいますか？」